

県道直方行橋線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告2

# 延永ヤヨミ園遺跡

## V-4~7区

—福岡県行橋市大字吉国所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第244集

2014

九州歴史資料館

県道直方行橋線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告書2

# 延永ヤヨミ園遺跡

## V-4～7区

—福岡県行橋市大字吉国所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第244集

2014

九州歴史資料館



平成23年度の調査全景(V-5区)



平成24年度の調査全景(V-5区)

## 序

福岡県では、西日本高速道路株式会社による東九州自動車道建設に併せて、県道直方行橋線道路改良事業を実施しています。事業は、東九州自動車道建設予定地内で最も大規模な遺跡の一つである延永ヤヨミ園遺跡が位置する低丘陵上に計画され、福岡県教育委員会では平成21年から同24年度にかけて発掘調査を実施しました。本書は、同事業にかかる2冊目の報告書となります。

延永ヤヨミ園遺跡では、東九州自動車道・国道201号行橋インター線建設に伴う発掘調査が近接して実施され、一部は成果が刊行されています。全体では弥生時代から中世にかけての長期間にわたる、非常に多種多様な遺構・遺物が出土しており、県道建設予定地内では古代の「津」に関連すると思われる掘立柱建物跡群も発見されました。ここで報告する調査区でも古代の土器や瓦が出土していますが、主体は弥生時代から古墳時代にかけての集落となります。

本書が、地域のみならず広範に歴史資料として活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、福岡県県土整備部及び関係諸機関、行橋市・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成26年3月31日

九州歴史資料館

館長 荒巻 俊彦

## 例　言

1. 本書は、県道直方行橋線道路改良事業に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市大字吉国に所在する遺跡の発掘調査の記録である。

2. 発掘調査・報告書作製は、福岡県県土整備部京築県土整備事務所からの執行委任を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して行橋市・同教育委員会の多大な御協力を得た。

3. 本書に掲載した写真は、遺構は調査担当者が、遺物は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。

なお、空中写真は東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリを使用して撮影したものである。

4. 本書に掲載した図面は、補助員・作業員の補助を得て調査担当者が作成した。

5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、城門の指導の下で実施した。

6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/25,000地形図「行橋」を改変したものである。

また、使用する座標は世界測地系による。

8. 本書の執筆はV-4区を宮地が行い、その他の執筆と編集は飛野が行った。

## 目 次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

I. はじめに.....	1
1. 発掘調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織と関係者.....	3
II. V-4区の調査.....	7
III. V-5区の調査.....	39
IV. V-6区の調査.....	153
V. V-7区の調査.....	170
VI. おわりに.....	177

## 図版目次

巻頭図版1 平成23年度の調査全景（V-5区）

巻頭図版2 平成24年度の調査全景（V-5区）

図版1 延永ヤヨミ園遺跡周辺の地形（東上空から）

### V-4区

図版2 1. 遠景（南西から） 2. 全景（上空から）

図版3 1. 2号竪穴住居跡土器出土状況（北東から） 2. 同（南東から）

3. 3・6号竪穴住居跡（南東から）

図版4 1. 4号竪穴住居跡（北西から） 2. 5号竪穴住居跡（南から）

3. 7号竪穴住居跡（南から）

図版5 1. 8~11・17号竪穴住居跡（北西から） 2. 9号竪穴住居跡カマド（南西から）

3. 12号竪穴住居跡（西から）

図版6 1. 13号竪穴住居跡（西から） 2. 14号竪穴住居跡（東から）

3. 15・16号竪穴住居跡（西から）

図版7 1. 1号土坑土層断面（西から） 2. 1号土坑（東から）

3. 1号炉跡（南西から）

図版8 1. 2号炉跡（東から） 2. 1・2号溝（東から）

3. 1号竪穴住居跡、3・5号溝（西から）

図版9 1. 3号溝（西から） 2. 4・6号溝（北東から）

3. 7号溝（北から）

図版10 1・2・4・7・8号竪穴住居跡出土土器

図版11 8・9・12号竪穴住居跡、1号土坑、2・7号溝出土土器

図版12 包含層、7号竪穴住居跡出土土器、出土石・土製品、瓦

### V-5区

図版13 1. 全景（南西上空から） 2. 全景（南上空から）

3. 全景（北東上空から）

図版14 1. 1号竪穴住居跡（北から） 2. 2号竪穴住居跡（南東から）

3. 3号竪穴住居跡（北西から）

図版15 1. 4号竪穴住居跡（北東から） 2. 5号竪穴住居跡（南西から）

3. 5号竪穴住居跡カマド（南東から）

図版16 1. 6号竪穴住居跡（南東から） 2. 6号竪穴住居跡カマド（北東から）

3. 6号竪穴住居跡カマド完掘後（南東から）

図版17 1. 8号竪穴住居跡（東から） 2. 10号竪穴住居跡（南西から）

3. 12・13号竪穴住居跡（北東から）

図版18 1. 15号竪穴住居跡（南東から） 2. 15号竪穴住居跡カマド（南西から）

3. 16号竪穴住居跡（南から）

- 図版19 1. 17号竪穴住居跡・掘立柱建物跡（西から） 2. 19号竪穴住居跡（南から）  
3. 20号竪穴住居跡検出時（南東から）
- 図版20 1. 21号竪穴住居跡（南から） 2. 22号竪穴住居跡（南西から）  
3. 23号竪穴住居跡（南東から）
- 図版21 1. 25号竪穴住居跡（南東から） 2. 26号竪穴住居跡（南から）  
3. 27号竪穴住居跡検出時（南東から）
- 図版22 1. 28-1・2号竪穴住居跡（東から） 2. 29号竪穴住居跡（南から）  
3. 29号竪穴住居跡カマド（北から）
- 図版23 1. 29号竪穴住居跡カマド支脚（南西から） 2. 30号竪穴住居跡（北東から）  
3. 31号竪穴住居跡（東から）
- 図版24 1. 32号竪穴住居跡（南から） 2. 33号竪穴住居跡カマド（南から）  
3. 35・36号竪穴住居跡（南西から）
- 図版25 1. 38号竪穴住居跡カマド（南東から） 2. 39号竪穴住居跡カマド（南東から）  
3. 40号竪穴住居跡検出時（南東から）
- 図版26 1. 41・42号竪穴住居跡（北東から） 2. 41・42号竪穴住居跡（南東から）  
3. 43号竪穴住居跡（西から）
- 図版27 1. 43号竪穴住居跡カマド（北から） 2. 43号竪穴住居跡カマド（北から）  
3. 45-1・2号竪穴住居跡（南西から）
- 図版28 1. 45-1・2号竪穴住居跡完掘後（南西から） 2. 45-1号竪穴住居跡屋内土坑（南東から）  
3. 45-1号竪穴住居跡土器出土状況（北東から）
- 図版29 1. 46号竪穴住居跡（西から） 2. 47・48号竪穴住居跡（北東から）  
3. 48号竪穴住居跡（南東から）
- 図版30 1. 48号竪穴住居跡完掘後（北西から） 2. 51号竪穴住居跡カマド（北東から）  
3. 54号竪穴住居跡（北西から）
- 図版31 1. 55号竪穴住居跡（南西から） 2. 56号竪穴住居跡カマド（南から）  
3. 57・58号竪穴住居跡（北西から）
- 図版32 1. 60号竪穴住居跡（北西から） 2. 61・62号竪穴住居跡（北東から）  
3. 61号竪穴住居跡カマド（南東から）
- 図版33 1. 62号竪穴住居跡カマド（北東から） 2. 61～66号竪穴住居跡付近（東から）  
3. 64号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版34 1. 65号竪穴住居跡（南東から） 2. 67号竪穴住居跡（南東から）  
3. 68号竪穴住居跡（南から）
- 図版35 1. 69号竪穴住居跡カマド（南東から） 2. 72号竪穴住居跡（南から）  
3. 74号竪穴住居跡（南東から）
- 図版36 1. 74号竪穴住居跡完掘後（南東から） 2. 74号竪穴住居跡カマド（北東から）  
3. 74号竪穴住居跡カマド（南東から）
- 図版37 1. 75号竪穴住居跡カマド（南から） 2. 76・78号竪穴住居跡（南東から）  
3. 77号竪穴住居跡（北西から）

- 図版38 1. 77号竪穴住居跡カマド（東から）  
3. 5号土坑（北東から）  
2. 82・83号竪穴住居跡（北東から）
- 図版39 1. 8号土坑（南東から）  
3. 13号土坑完掘後（南西から）  
2. 13号土坑（北東から）
- 図版40 1. 1号火葬墓（東から）  
3. 2号火葬墓土器出土状況（西から）  
2. 2号火葬墓検出時（西から）
- 図版41 1. 2号火葬墓完掘後（西から）  
3. 円形周溝（北東から）  
2. P731（西から）
- 図版42 1. 円形周溝北東部（北東から）  
3. 67号竪穴住居跡上鍛冶炉完掘後（南から）  
2. 67号竪穴住居跡上鍛冶炉検出時（西から）
- V-6区
- 図版43 1. 全景（上空から）  
3. 全景（南東から）  
2. 全景（北西から）
- 図版44 1. 10号竪穴住居跡（南から）  
3. 2号掘立柱建物跡（北東から）  
2. 12号竪穴住居跡・1号掘立柱建物跡（北西から）
- 図版45 1. 2号掘立柱建物跡（北西から）  
3. 2号埋甕（南東から）  
2. 1号埋甕（南西から）
- 図版46 1. 3号埋甕（北西から）  
3. 5号溝土層（南西から）  
2. 1・2号溝土層（南から）
- V-7区
- 図版47 1. 全景（北から）  
3. 1号溝（南から）  
2. 全景（南から）
- 図版48 出土土器1（5区住5・6・10・15・16・17・18・21）
- 図版49 出土土器2（5区住22・23・29）
- 図版50 出土土器3（5区住30・31・34・35・36・38・39・42）
- 図版51 出土土器4（5区住42・43・45・48）
- 図版52 出土土器5（5区住48・51・54・57・58）
- 図版53 出土土器6（5区住61・63・64・66・69・71・72・74）
- 図版54 出土土器7（5区住74）
- 図版55 出土土器8（5区住74・75・76）
- 図版56 出土土器9（5区住74・土坑・溝、6区住8-16・埋甕）
- 図版57 出土土器10（6区埋甕・溝5）、その他の出土遺物1（玉類・滑石製品等）
- 図版58 その他の出土遺物2（石庖丁・鉄製品）
- 図版59 その他の出土遺物3（砥石）

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	x
第2図	延永ヤヨミ園遺跡の位置 .....	1
第3図	延永ヤヨミ園遺跡調査区割図 (1/2,000) .....	2
第4図	延永ヤヨミ園遺跡V-4~7区遺構配置図 (1/300) .....	折込
V-4区		
第5図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	7
第6図	1・2・5号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	8
第7図	1号竪穴住居跡、3・5号溝出土土器・瓦実測図 (1/3) .....	9
第8図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3) .....	10
第9図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3) .....	11
第10図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3) .....	12
第11図	3・4・6号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	14
第12図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	15
第13図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	16
第14図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30) .....	17
第15図	6・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	18
第16図	8・12・13号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	20
第17図	8・9号竪穴住居跡出土土器・瓦実測図 (1/3) .....	21
第18図	9~11・17号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30) .....	22
第19図	12~15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	24
第20図	14号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	25
第21図	15・16号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	26
第22図	1号土坑、1・2号炉跡、1~6号溝実測図 (土坑は1/60、炉跡は1/30、溝は1/40) .....	28
第23図	1号土坑出土土器・瓦実測図 (1/3) .....	29
第24図	1号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	30
第25図	溝出土土器・瓦実測図 (1/3) .....	32
第26図	ピット・調査区側溝出土土器実測図 (1/3) .....	34
第27図	包含層出土土器実測図 (1/3) .....	35
第28図	包含層出土瓦実測図 (1/3) .....	36
第29図	出土土製品・石製品実測図 (1/2) .....	37
V-5区		
第30図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	40
第31図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	40
第32図	1~3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	41
第33図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	42
第34図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	43

第35図	3・4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	43
第36図	5号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	44
第37図	5号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) .....	44
第38図	5号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	45
第39図	6号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) .....	45
第40図	6～8号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	46
第41図	6号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	47
第42図	7・8・10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	48
第43図	10・39号竪穴住居跡、4号土坑実測図(1/60) .....	50
第44図	11・32・66号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	51
第45図	11～13・15・16号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	52
第46図	12・13号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	53
第47図	14号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	54
第48図	15・16・19号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	55
第49図	17号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	56
第50図	17号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	57
第51図	18号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	58
第52図	18～21号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	59
第53図	20号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	60
第54図	21号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	61
第55図	21号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) .....	61
第56図	21号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	62
第57図	22号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	63
第58図	22号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	64
第59図	23・24号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	65
第60図	23・25・26号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	66
第61図	25号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	67
第62図	26号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	68
第63図	27号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	69
第64図	28-1・2、31号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	70
第65図	28-1、29号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	71
第66図	29号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	72
第67図	29号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) .....	72
第68図	30・61～65号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	74
第69図	30～33号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	75
第70図	33・34号竪穴住居跡実測図(1/60) .....	76
第71図	33号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) .....	76
第72図	34・35号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	77

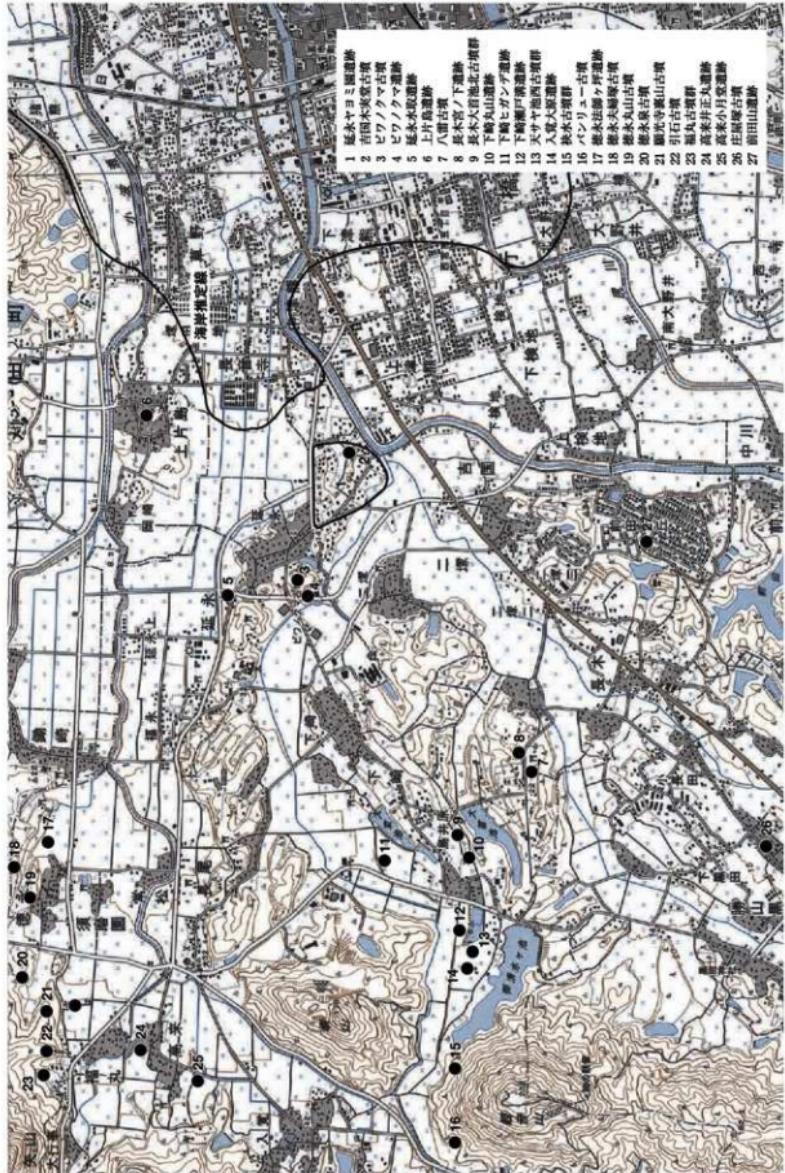
第73図	35・36・38号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	折込
第74図	37・51号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	81
第75図	36～38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	82
第76図	38号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	83
第77図	39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	84
第78図	39・41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	84
第79図	40～42号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	85
第80図	42号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	86
第81図	42号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	88
第82図	42号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3) .....	89
第83図	42号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/3) .....	90
第84図	42号竪穴住居跡出土土器実測図5 (1/3) .....	91
第85図	43・44・53号竪穴住居跡・円形周溝実測図 (1/60) .....	92
第86図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	93
第87図	43号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	94
第88図	44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	94
第89図	45-1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	95
第90図	45-1・2号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	96
第91図	45-1・2号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	97
第92図	46号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	99
第93図	46号竪穴住居跡及び周辺出土土器実測図 (1/3) .....	100
第94図	47～49号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	折込
第95図	47・48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	103
第96図	48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	104
第97図	49号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	105
第98図	51号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	105
第99図	51号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	106
第100図	51号竪穴住居周辺出土土器実測図 (1/3) .....	107
第101図	52・54・79号竪穴住居跡等実測図 (1/60) .....	108
第102図	52～55号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	108
第103図	54号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	109
第104図	55号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	110
第105図	56号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30) .....	111
第106図	57～59号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	111
第107図	57号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	112
第108図	56・57号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	112
第109図	58号竪穴住居跡及び周辺出土土器実測図 (1/3) .....	113
第110図	59号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	114

第111図	60号竪穴住居跡等実測図 (1/60) .....	114
第112図	61・62・64号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	115
第113図	60～65号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	116
第114図	66～68号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	118
第115図	67・68号 (V4-16号) 竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	119
第116図	69・71・72号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	120
第117図	69・71号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	121
第118図	69・71号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	121
第119図	72・73号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	122
第120図	73号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	124
第121図	74号竪穴住居跡・15号土坑実測図 (1/60) .....	125
第122図	74・75号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30) .....	125
第123図	74号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3) .....	126
第124図	74号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3) .....	127
第125図	74号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3) .....	128
第126図	75号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	129
第127図	75・76・78号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	130
第128図	76号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30) .....	131
第129図	76号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	132
第130図	77号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30) .....	133
第131図	77号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	133
第132図	78 (80) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	134
第133図	81～83号竪穴住居跡・1号溝土層実測図 (1/60) .....	折込
第134図	82・83号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	137
第135図	掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3) .....	138
第136図	掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	139
第137図	3号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	139
第138図	土坑等実測図 (1/40) .....	140
第139図	4号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	141
第140図	5・8～10号土坑出土土器実測図 (1/3) .....	142
第141図	13号土坑実測図 (1/40) .....	143
第142図	13号土坑出土土器等実測図 (1/3) .....	144
第143図	火葬墓実測図 (1/20) .....	145
第144図	火葬墓出土土器実測図 (1/3) .....	145
第145図	円形周溝出土土器実測図 (1/3) .....	146
第146図	1号溝出土土器実測図1 (1/3) .....	147
第147図	1号溝土層実測図 (1/40) .....	148
第148図	1号溝出土土器実測図2 (1/3) .....	149

第149図	柱穴出土土器実測図 (1/3) .....	150
V-6区		
第150図	1~4号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	153
第151図	2・5~8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	154
第152図	5・6号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	156
第153図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	156
第154図	8号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	157
第155図	9号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	157
第156図	10号竪穴住居跡実測図 (1/60) .....	158
第157図	10・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	158
第158図	12~15号竪穴住居跡・1号掘立柱建物跡実測図 (1/60) .....	159
第159図	1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3) .....	160
第160図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	162
第161図	1・2号埋甕実測図 (2は1/3、他は1/6) .....	164
第162図	埋甕実測図 (1/30).....	165
第163図	3号埋甕実測図 (1/6) .....	165
第164図	溝土層実測図 (1/40).....	166
第165図	1~5号溝出土土器実測図 (1/3) .....	167
V-7区		
第166図	1号溝出土土器実測図 (1/3) .....	170
V-5~7区		
第167図	5~7区出土玉類・滑石製品等実測図 (2/3、1/2) .....	172
第168図	5~7区出土石斧・石庖丁等実測図 (2/3、1/2) .....	172
第169図	5~7区出土鉄製品実測図 (1/2) .....	173
第170図	5~6区出土鉄滓実測図 (1/2) .....	173
第171図	5~7区出土砥石等実測図I (1/2) .....	174
第172図	5~7区出土砥石等実測図2 (1/2) .....	175
第173図	5~7区出土砥石等実測図3 (1/2) .....	176
第174図	延永ヤヨミ園遺跡V区周辺遺構変遷図 (1/1,000) .....	178

## 表目次

表1	延永ヤヨミ園遺跡V区調査年度 .....	1
表2	延永ヤヨミ園遺跡V4~6区検出竪穴住居跡一覧表 .....	181~183



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

# I. はじめに

## 1. 発掘調査に至る経緯

九州東部に位置する各県が久しく待望して  
いた東九州自動車道は、既に供用されている  
苅田北九州空港I.C.から新設の行橋I.C.に至  
る間が平成25年度に、26年度には宮崎県ま  
での供用開始が予定されている。この東九州  
自動車道は行橋市・京都郡苅田町の境界に広  
がる水田地帯を南下して、行橋市延永ヤヨミ  
園遺跡の位置する低丘陵を横断するが、この  
低丘陵のすぐ北で県道直方行橋線と交差す。  
この県道は、10数年前に延永地区の住宅地を  
迂回するバイパスが建設されたが、東九州自  
動車道はこのバイパスが旧道に合流する交差  
点を路線内に取り込んで設計された。東九州  
自動車道と県道バイパスは斜めに交差するこ  
ともあって、県道は高速道路の西側に添うよ

うに付け替えられることとなった。高速道路建設用地内では平成19年度から、関連して建設され  
ている国道201号バイパス建設用地内でも同20年度から延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査が開始され、  
丘陵部から低地（小谷）まで各時代の各種遺構・遺物が濃密に検出されていた。

県道建設予定地内も同様であろうとの予測をしていたが、果たして最初に着手した北端の調査区  
(V-1区)で古代「津」に関わると思われる官衙的配置をもつ掘立柱建物跡群が現れたほか、弥生  
時代から古墳時代に至る多くの竪穴住居跡が検出された。その後、発掘調査は用地の進捗に併せて  
南へ展開し、V-2~4区の調査を平成22年度に、同5~7区の調査を平成23・24年度に実施した。

報告書の作成に際して、4区については5区と隣接し、同一の住居跡を別個に報告するよりは同  
じ報告書に掲載しようということで、1~3区、4~7区の2分冊とすることとし、本書をもってこの  
事業の報告は完了する。

発掘調査に至る経過の詳細については昨年度刊行の「延永ヤヨミ園遺跡-V-1・2・3区-」(『福  
岡県文化財調査報告書』第238集、  
2013) を参照されたい。

以下では、V-5~7区の調査  
経過について簡略に記す。

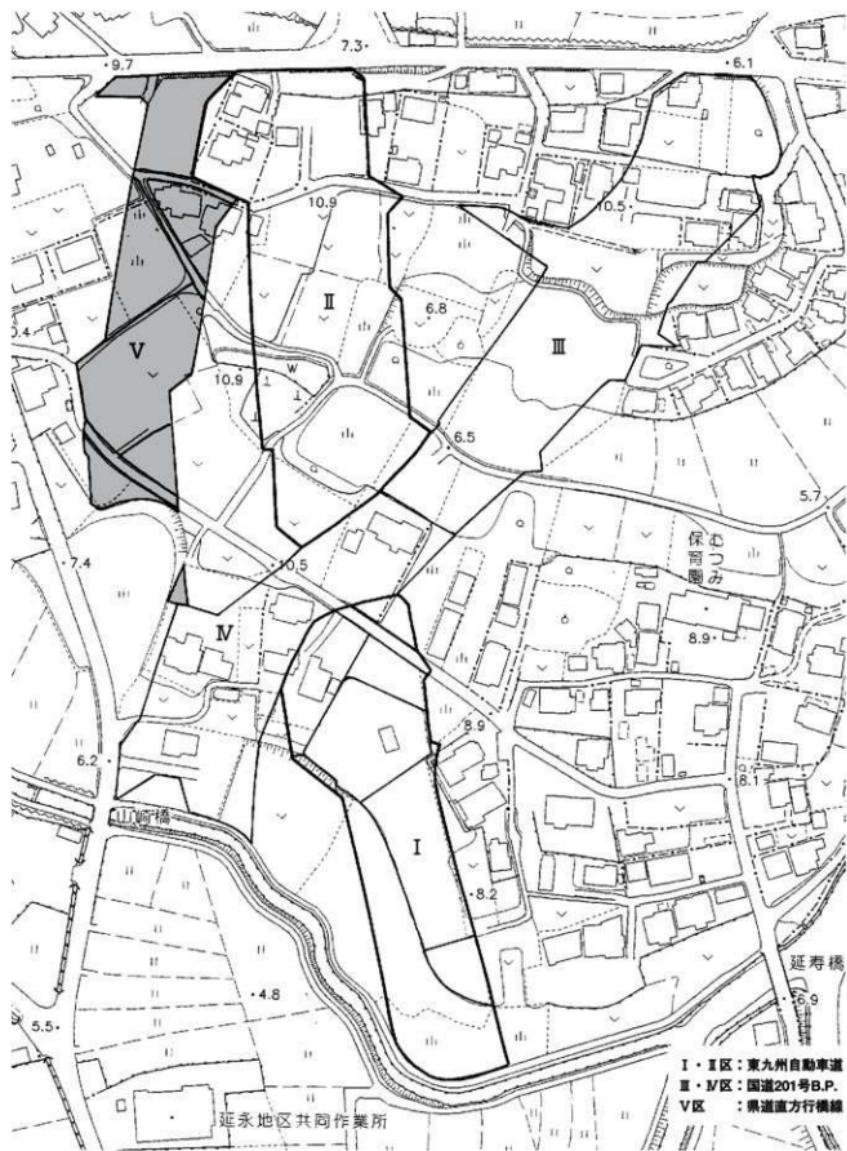
平成23年度は福岡県教育庁の  
組織改編によって、同総務部文化  
財保護課の発掘調査部門が九州歴



第2図 延永ヤヨミ園遺跡の位置

	調査面積	調査期間	担当者	報告書
V-1区	1100	H21.06.26~12.11	岡田・小澤	県報第238集
V-2区	700	H22.08.11~10.28	宮地	県報第238集
V-3区	1000	~H23.01.19	宮地	県報第238集
V-4区	400	H22.12.21~23.03.17	宮地	県報第244集本冊
V-5区	2000	H23.07.05~24.03.22 H24.05.08~07.20	飛野	県報第244集本冊
V-6区	400	H23.07.05~24.03.22 H24.05.08~07.20	飛野	県報第244集本冊
V-7区	100	H23.07.05~24.03.22	飛野	県報第244集本冊

表1 延永ヤヨミ園遺跡V区調査年度



第3図 延永ヤヨミ園遺跡調査区割図(1/2,000)

史資料館へ集約された。年度当初の福岡県土整備部京築県土整備事務所との協議の中で、バイパス建設予定地の用地買収がほぼ終了したこと、一部で計画変更があって対象面積が若干増えたことなどが確認され、事務手続きを経て調査に着手したのは同23年7月5日からである。調査対象地内にはやがて付け替え・廃止となる市道が含まれていて、その北側の調査区のうち3・4区の間を5区、市道南を6区、かつては池であったという谷を挟んで国道バイパスに接する部分を7区として地区を分けた。

3・5区の間は地籍上は畠地であるが、実際は里道として利用されていたために、調査を行っていない。また、5区南東部及び6区北西部には住宅のコンクリート基礎があって、一部を重機で除去したが、除去が困難であり遺構面に掘り込まれているために、これもそのままとしている。

5区の調査に当たって、当初は調査が終了していた4区にハウス等を設置し、進入路として使用するために4・5区の境付近は表土掘削を行わずにいた。その後、やはり調査の終了した国道バイパス用地内にハウス等を設置する許可を得て、今回の調査対象地のすべての表土掘削を行った。24年2月迄には重複した住居跡の下層を掘り上げれば終了するという段階まで調査が進捗したもの、3月はじめに雨が続いたために年度内の調査終了を断念、翌年度への調査継続を県土整備事務所へ依頼して了解された。

発掘調査に際して、2軒の竪穴住居跡や数条の溝が4・5区で別個に調査された。報告にあたっては内容を集約して提示すべきであるが、4区の担当者（宮地）は原稿一式を残して東北へ派遣されておりすりあわせができるないので、そのまま別個に報告する。

なお、調査地周辺の地理的・歴史的環境については既刊の報告書を参照されたい。

## 2. 調査の組織と関係者

本報告に掲載した各遺跡の発掘調査・報告書作成に至る間の福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。なお、上述したように平成23年度に福岡県教育委員会は組織を改編して、文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査部門を九州歴史資料館文化財調査室へ移管した。

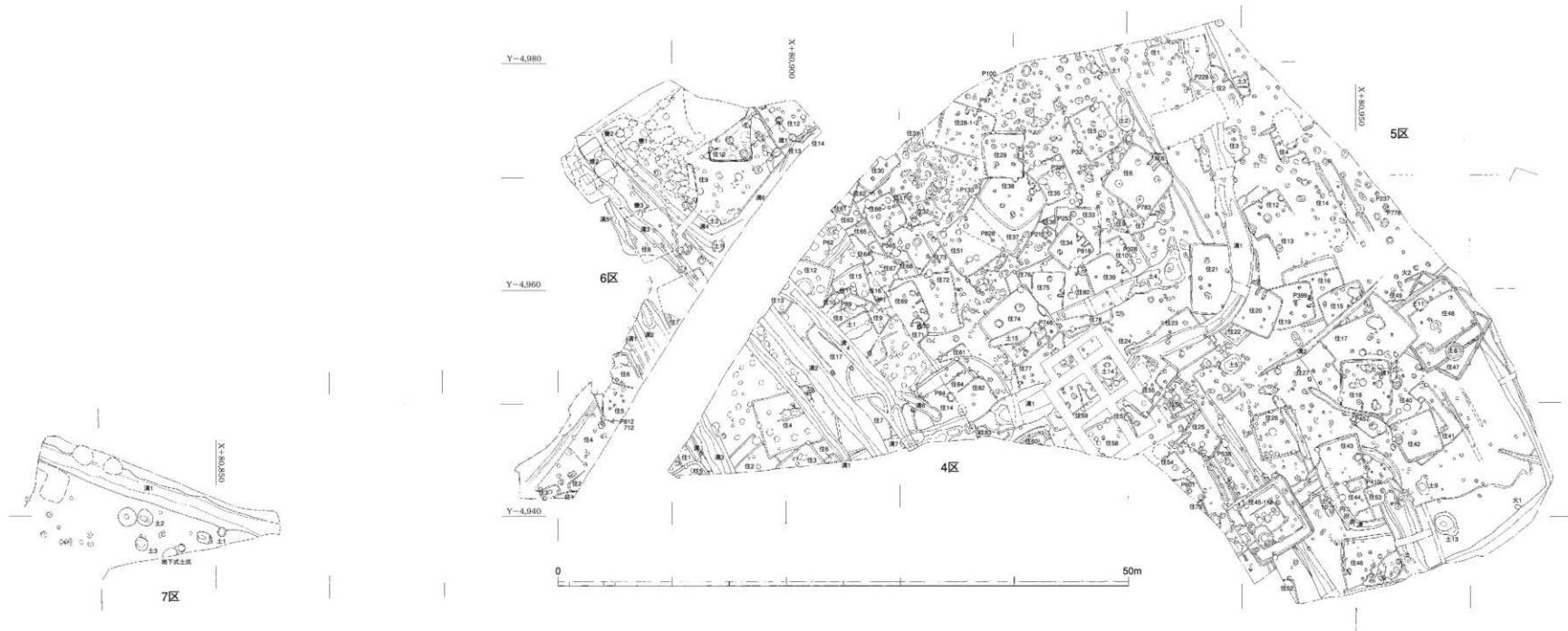
	22年度	23年度	24年度	25年度
福岡県教育委員会				
総括				
教育長	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副課長	伊崎俊秋			
参事	小池史哲			
課長補佐	日高公徳			
調査第一係長	吉村靖徳			
庶務				
管理係長	富永育夫			

	22年度	23年度	24年度	25年度
庶務担当	仲野洋輔			
調査・整理				
企画係技術主査	宮地聰一郎 (担当)	宮地聰一郎	宮地聰一郎	大庭孝夫 (担当)
<b>九州歴史資料館</b>				
総 括				
館 長	西谷 正	西谷 正	荒巻俊彦	
副館長	南里正美	篠田隆行	篠田隆行	
企画主幹 (総務室長)	圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子	
参考 (文化財調査室長)			飛野博文 (担当)	
企画主幹 (文化財調査室長)	飛野博文 (担当)	飛野博文 (担当)		
企画主幹 (文化財調査室長補佐)	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳	
技術主査 (文化財調査班長)	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	
庶 務				
企画主査	塩塚孝憲	長野良博	長野良博	
事務主査		青木三保	青木三保	
			南里成子	
主任主事	熊谷泰容			
	近藤一崇	近藤一崇		
主 事	谷川賢治	谷川賢治	三好洸一	
調査・整理報告				
技術主査 (保存管理班長)	加藤和歲	加藤和歲	加藤和歲	
同参考補佐	小池史哲	小池史哲	池邊元明	
主任技師			城門義廣	
技 師		小林 啓	小林 啓	

発掘調査に当たっては、地元在住の方々をはじめ、調査に参加した方々、行橋市・同教育委員会、京築県土整備事務所、工事関係者などのご理解・ご協力を得て無事に終えることができました。改めて感謝申し上げます。



建設工事の進む県道直方行橋線



第4図 延永ヤヨミ園遺跡V-4～7区遺構配置図 (1/300)

## II. V-4区の調査

### 1. 調査の概要

V-4区はV-5区の南側に隣接し、面積は約400m<sup>2</sup>である。標高は調査区中央付近で約10.6mありほぼ平坦である。調査前は畠地として利用されており、遺構の遺存状況は比較的良好であった。

遺構は表土直下の黄褐色粘質土の地山面上に確認でき、遺構の識別は容易であったが、遺構密度は特に北側で高く、その部分では遺構の切り合い関係の把握に苦慮した。遺構は弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴住居跡が17軒、奈良時代の土坑が1基、中世の溝が7条、炉跡が2基確認された。

### 2. 竪穴住居跡

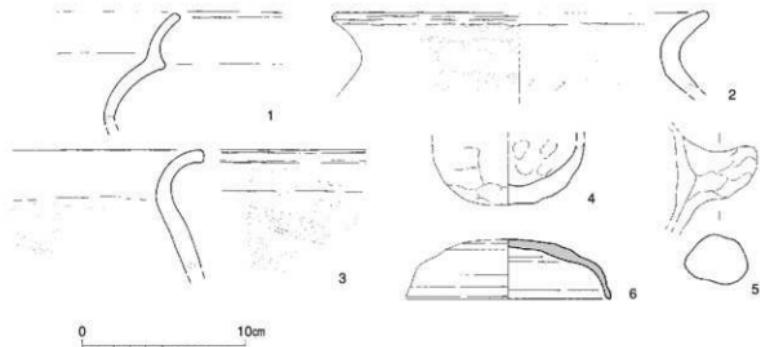
#### 1号竪穴住居跡（図版8、第6図）

調査区南端に位置し、3号溝、5号溝に切られ、5号竪穴住居跡を切る。平面形態は方形で、西側及び南西隅は調査区外に延びる。3号溝の北側斜面で1号竪穴住居跡の壁面と思われる立ち上がりが確認でき、南北の規模は4m程と推定される。埋土は南側の壁面近くに黄褐色バイラン土主体の土が堆積するが、その他は暗褐色粘質土が主体である。

床面には地山の黄褐色土を主体とした貼床を施す。遺構検出時は切り合い関係を確認することができず、掘削途中で明らかとなった経緯もあり、壁面の立ち上がりはわずかに残る程度でしか確認できなかった。柱穴はおそらく4本と思われる。

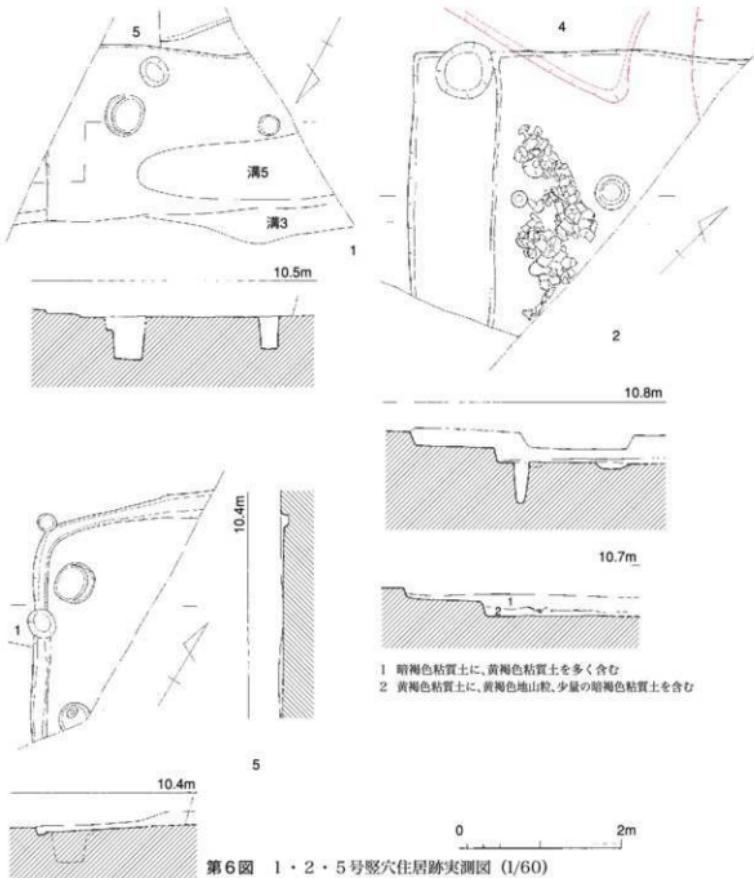
#### 出土土器（図版10、第5・7図）

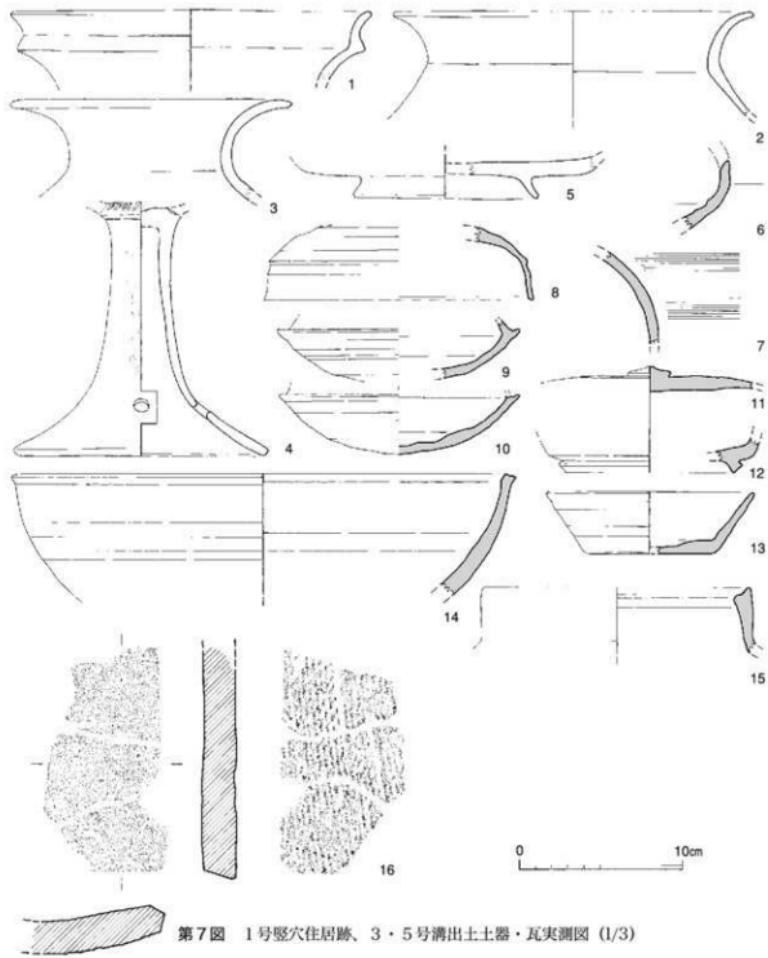
1は二重口縁壺の口縁部～頸部で、屈曲部は突出し口縁部は外反する。器面は磨滅が著しい。2・3は甕の口縁部である。短く外反し内外面は刷毛目調整を行う。3は口縁端部に広い面を持つ。4は甕の底部で丸みを帯びる。指押さえが見られ、内外面とも器面はいびつである。5は瓶の把手部分である。6は須恵器杯蓋で稜ではなく、天井部は回転籠削りを施す。



第5図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

また、第7図は1号竪穴住居跡と3・5号溝の切り合い部分から出土したもので、1号竪穴住居に伴う遺物を中心に新しい時期のものが混在している。1は二重口縁壺の口縁部～頸部で、屈曲部は突出し口縁部は外反する。器面は磨滅が著しい。2・3は広口壺で口縁部は外に広がりながら外反する。器面は磨滅が著しい。4は高杯の脚部で、裾部は緩やかに外反しながら開く。杯部との接合部の擬口縁には刻みを切りこむ。穿孔は3箇所に見られ、外面は刷毛目調整の後籠磨き調整を行う。5は土師器皿で高台が取り付く。内面に一部丹塗りが認められる。6は須恵器縁の体部下半部である。円孔の一部が確認できる。7は須恵器の壺や縁の可能性のある体部でカキ目を施す。8は須恵器杯蓋で天井部と口縁部の境に段を有し、口縁端部内面は稜を形成する。天井部は回転籠削りを行う。9は須恵器杯身で口縁端部は欠損している。体部下半は回転籠削りを行う。10も須恵器杯身だが口縁部は欠損する。11は須恵器杯蓋でつまみを有し、天井部は回転籠削りを行う。12は須恵器杯身で高台がハ字状に取り付く。13は須恵器杯身で体部は直線的に開く。底部は籠削りを行う。14は須恵





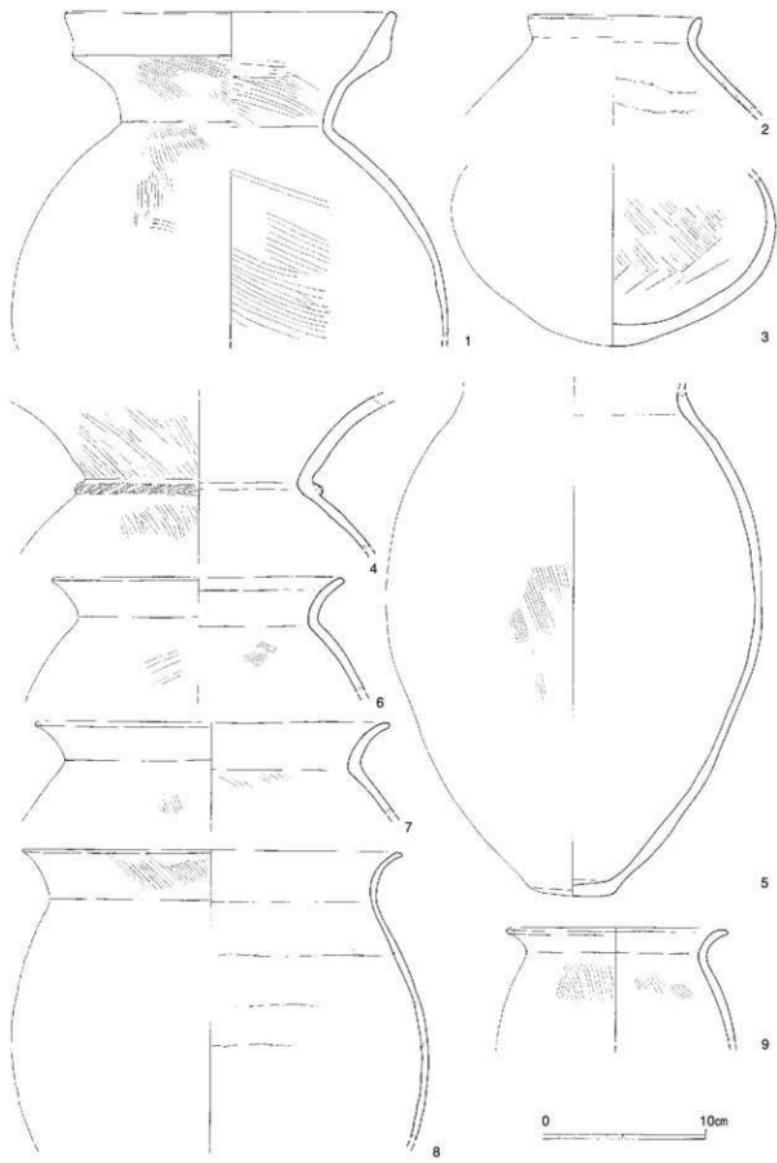
第7図 1号竪穴住居跡、3・5号溝出土土器・瓦実測図 (1/3)

器で器台の可能性があり、口縁端部は外側に少し突出する。体部に文様はなく全面を回転撫で調整によって仕上げる。15は須恵器だが器種は不明。口縁部は端部に近くなるほど太く、端部は窪む。16は平瓦で凸面は綱叩きを施し、四面は撫でによって仕上げる。

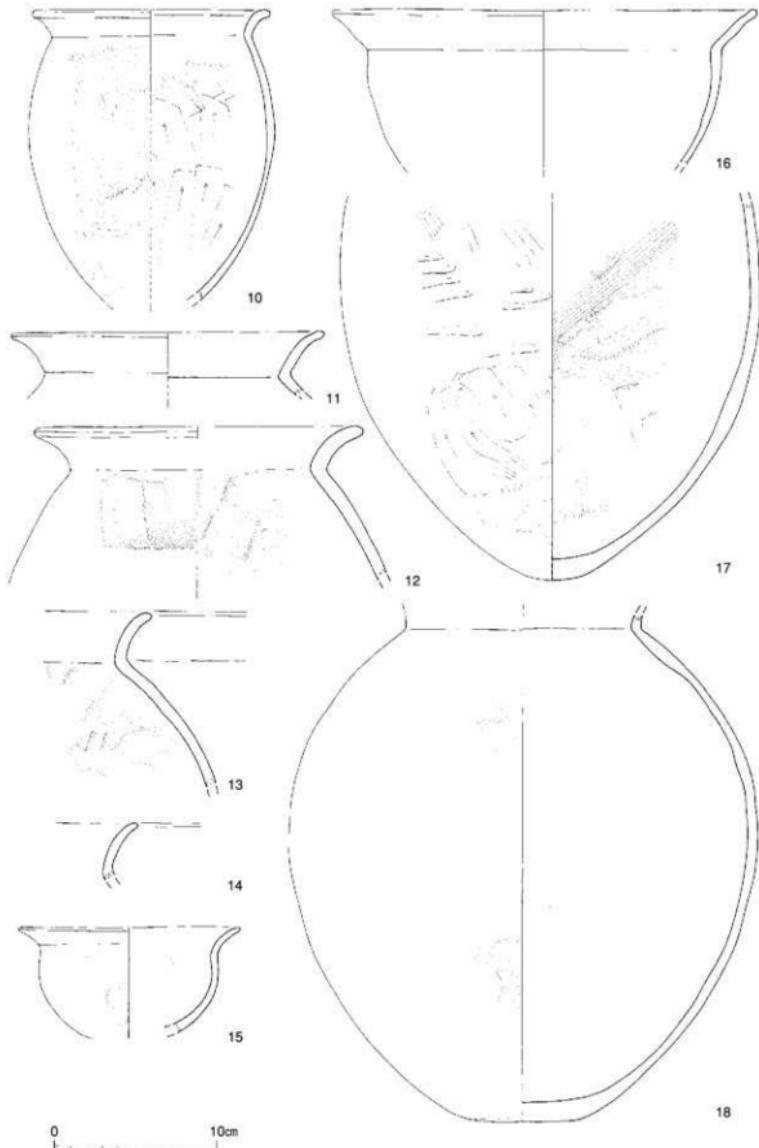
出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

## 2号竪穴住居跡 (図版3、第6図)

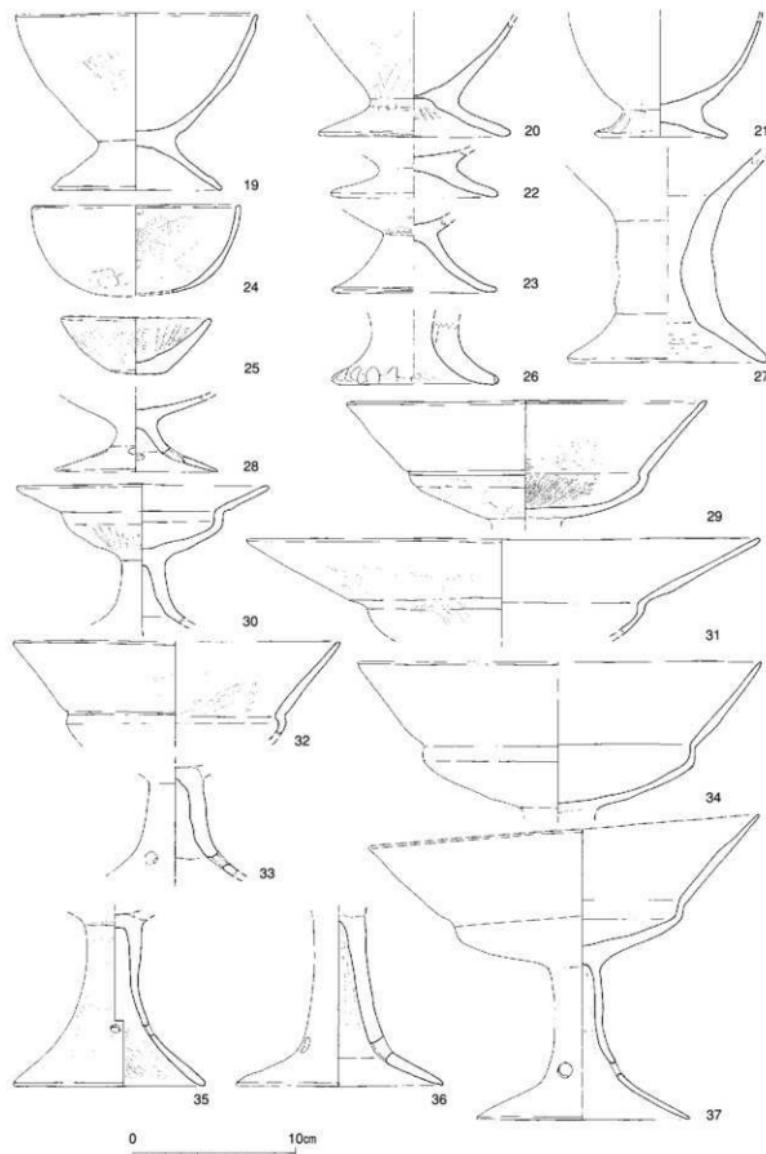
調査区南東に位置し、3・4号竪穴住居跡、3号溝に切られる。平面形態は方形で、東側半分は調査区外に延びる。柱穴及び炉の位置より類推するならば、北西—南東方向の規模は3.6m程に復元できる。



第8図 2号竖穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第9図 2号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)



第10図 2号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

南西側にはベッド状遺構が確認でき、床面との段差は約0.2m程である。主柱穴は2本と思われ、中央には床が赤変した跡が確認できる。埋土は2層に分かれ、下層の黄灰褐色粘質土上面で多量の土器が廃棄された状況が確認できた。

#### 出土土器（図版10、第8～10図）

1は二重口縁壺で口縁屈曲部の内面はなだらかである。器面は磨滅しているが刷毛目調整が確認できる。2は壺で口縁部は短くやや外側に開き気味に立ち上がる。器面は磨滅しているが、内面は粘土紐の接合痕が確認できる。3は壺の底部で丸底を呈する。外面は磨滅しているが丁寧な撫でもしくは籠磨きによって仕上げる。内面は刷毛目調整と板状工具の圧痕が見られる。4は壺の頸部～体部である。屈曲部に突帯を貼り付け、右上がりの長い刻目を施す。器面は磨滅しているが外面に刷毛目調整が確認できる。5は長胴壺で口縁部を欠損する。底部は尖り気味に仕上げ、底面に刷毛目調整を施す。体部の器面は磨滅しているが、一部で刷毛目調整が確認できる。

6～14は甕である。6・7・11～13は内面に稜をもつて屈曲し、8～10の屈曲部はなだらかである。口縁部は外反しながら外側に開く。器面は磨滅しているものもあるが、多くのもので刷毛目調整が確認できる。10の内面は削り調整も見られる。8は内面に粘土の接合痕が確認できる。

15・16は鉢である。15は口縁部が緩やかに外反し、外面は刷毛目調整、内面は刷毛目調整の後に籠磨き調整を行う。16は屈曲部内面に稜を有する。器面は磨滅が著しい。17は甕の底部で丸底を呈する。外面は刷毛目調整の他、底部近くで削り調整、中程で叩き調整の痕跡が確認できる。内面は刷毛目調整で仕上げる。18は壺で口縁部は欠損する。底部は丸みを帯びており、内外面とも磨滅が著しいが一部で刷毛目調整が確認できる。

19～23は脚付鉢もしくは脚付甕である。20は脚部内面に刷毛目調整、21は脚部外面に指押さえが確認できる。24は楕で底部付近に一部削り調整が確認できる。25は小型の鉢で内外面刷毛目調整を行う。26・27は器台である。26は端部に刻目を施し、裾部内面に刷毛目調整を行う。27は雑なつくりで、特に円柱部はいびつで表面がこぼこしている。器面は磨滅が著しいが、裾部内面に刷毛目調整の痕跡が残る。28は低脚高杯で4箇所に透孔を持つ。

29～37は高杯である。体部は上半が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内面に明瞭な稜を持って屈曲し外側に直線的に開く。裾部は緩やかに外反する。磨滅しているが、刷毛目調整の後に籠磨き調整を行ったものが多い。30の体部外面は暗文状に仕上げる。32と33は接合しないが同一個体の可能性高い。33の脚部は3箇所に透孔を穿つ。35の脚部は緩やかに外反し、内外面に刷毛目調整を施す。36・37の脚部内面には絞り痕が残る。脚部の透孔は36は2箇所、37は3箇所に穿つ。

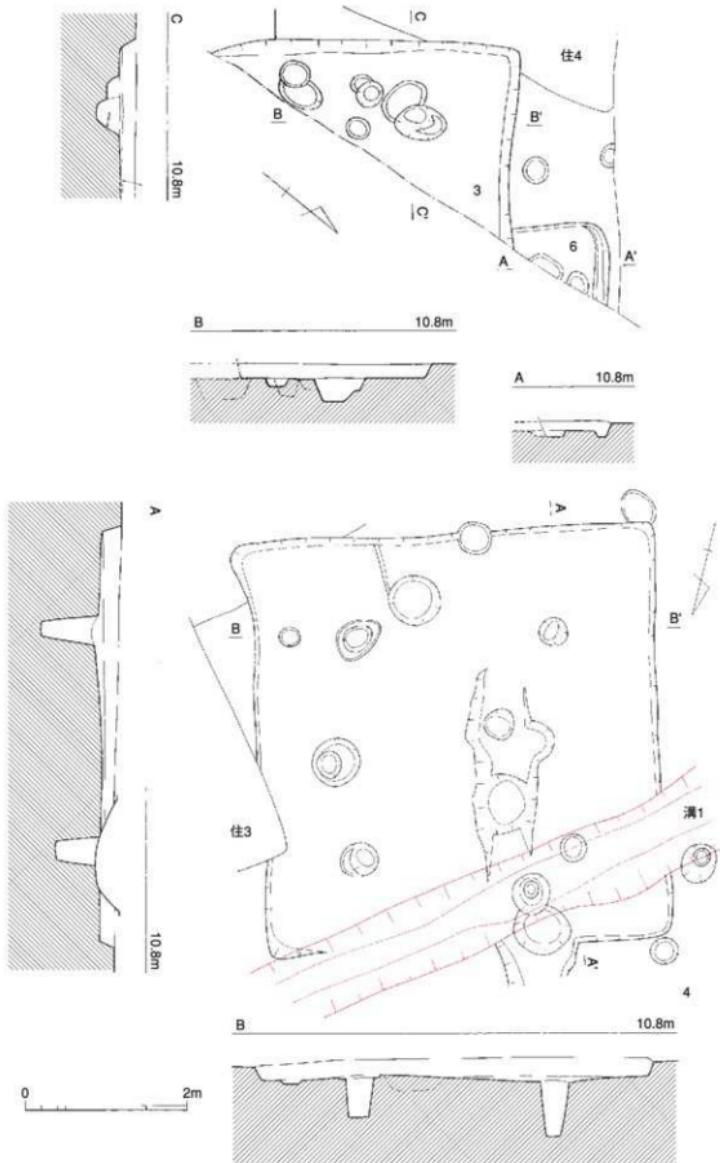
出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡と考えられる。

#### 3号竪穴住居跡（図版3、第11図）

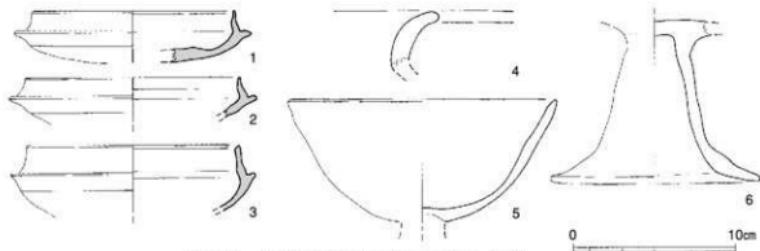
調査区東端に位置し、2・4・6号竪穴住居跡を切る。方形プランだが大部分は調査区東側に延びるため詳細な規模は不明。埋土は暗褐色粘質土である。壁溝は確認できず主柱穴も不明。柱穴も判然としない。

#### 出土土器（第12図）

1～3は須恵器杯身である。3は口縁部が若干長く、端部内面に弱い沈線を施す。4は甕の口縁部と思われる全体的に外反する。5は高杯の杯部で器面は磨滅が著しい。脚部との接合部には擬口縁が



第11図 3・4・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第12図 3号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

見られる。6は高杯脚部で器面は磨滅が著しい。

出土土器から古墳時代後期の竖穴住居跡と考えられる。

#### 4号竖穴住居跡 (図版4、第11図)

調査区東寄りに位置し、2号竖穴住居跡を切り、3号竖穴住居跡及び1号溝に切られる。南北5m程、東西5.2m程の方形プランである。埋土は暗褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合土で少量地山ブロックを含む。

床面近くは黄褐色粘質土の地山を主体に灰褐色粘質土が斑状に混じっており、貼床を施していた可能性が高い。また、床面中央やや西寄りには南北に長い落ち込みが存在し、住居跡の埋土との鑑別ができるなかったが、住居跡の北側に延びる落ち込みと関係する可能性が高く、住居跡とは直接関係がないと思われる。主柱穴は4本でいずれも非常に深いのが特徴である。時期的に北壁にカマドの存在が予想されたが、1号溝に壊されたためか確認できなかった。

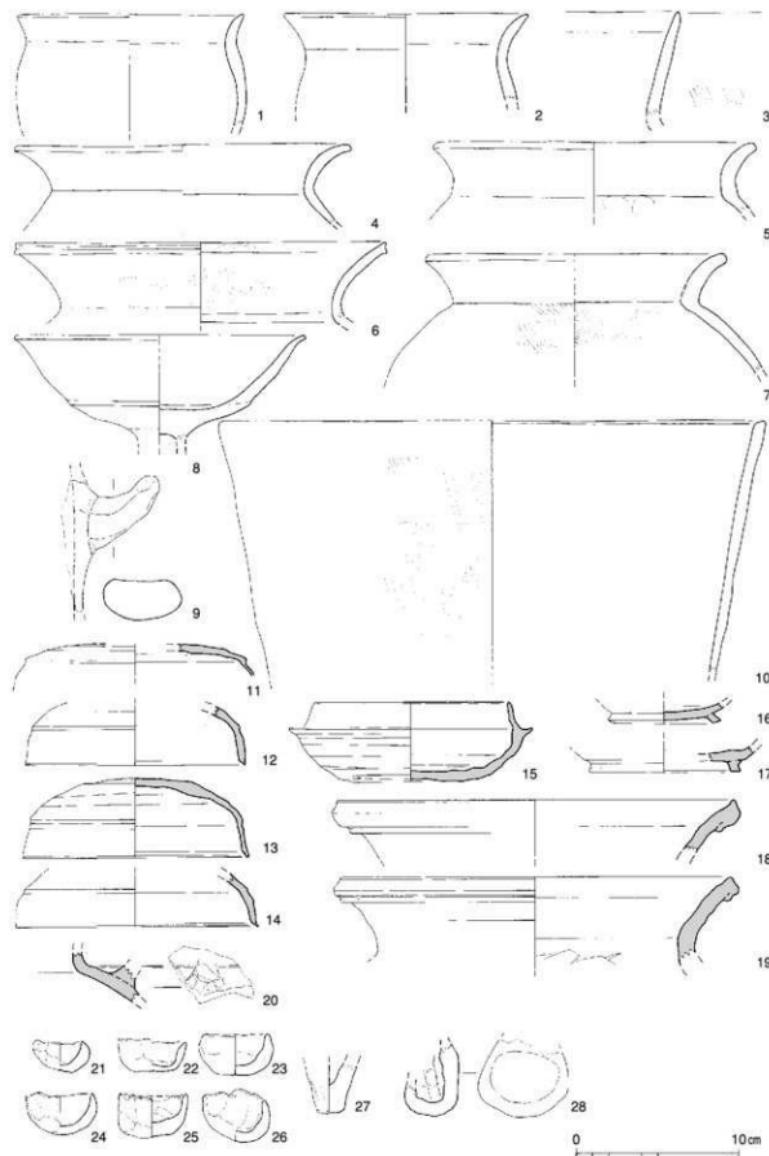
#### 出土土器 (図版10、第13図)

1～7は甕である。1・2は体部の張りが弱く口縁部が緩やかに外反する。3は直線的な口縁部が外に開く。4～7は体部の張りが強く、屈曲部内面は稜を持つものが多い。6の口縁端部は大きく窪み、外端部は突出する。7は内外面に粗い刷毛目調整が特徴的である。8は高杯で体部と口縁部との境に段を有する。口縁部は端部のみ僅かに外反する。9は瓶の把手で一部に刷毛目調整が見られる。10は直線的に外傾する器形で、器種は不明ながら甕の類かと思われる。器面は磨滅しているが外面に刷毛目調整が見られる。

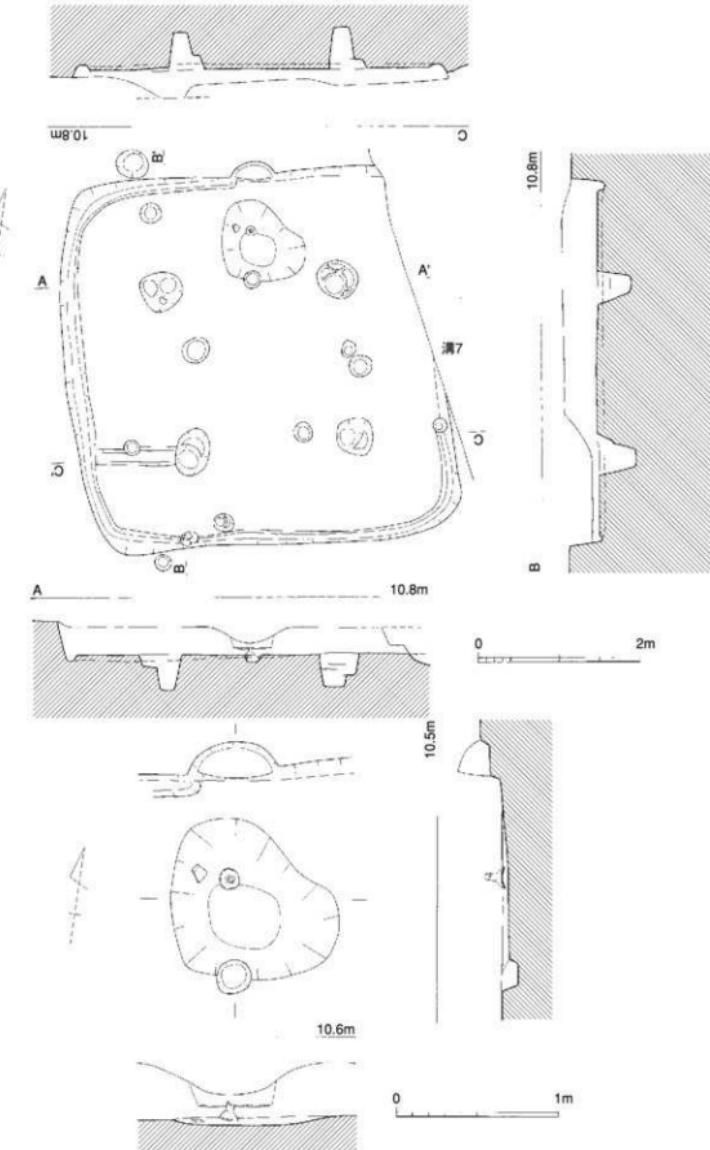
11～14は須恵器杯蓋である。いずれも天井部と口縁部の境に段が見られるが、14の段は弱い。口縁端部は内面に沈線を施し、天井部には回転箇削りを施す。15は須恵器杯身で底部に回転箇削りを施す。16・17は須恵器杯身で高台が取り付く。17の高台は外端部が外側に突出する。18・19は須恵器甕である。いずれも口縁部外側を肥厚させ、撫でによって口縁部外側と端部を窪ませる。20は須恵器の提瓶と思われ、欠損する耳が取り付く。

21～28は手捏土器である。21～26は指押さえが著しく全体を楕円形に仕上げる。27は細い棒状に仕上げるが全体の形状は不明。28は中空の土製品の可能性があるが全体の形状は不明である。内面は指押さえ、外面は撫でにより平らに仕上げる。

16・17の須恵器は混入の可能性が高く、その他の出土土器から古墳時代後期の竖穴住居跡と考えられる。



第13図 4号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第14図 7号竖穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)

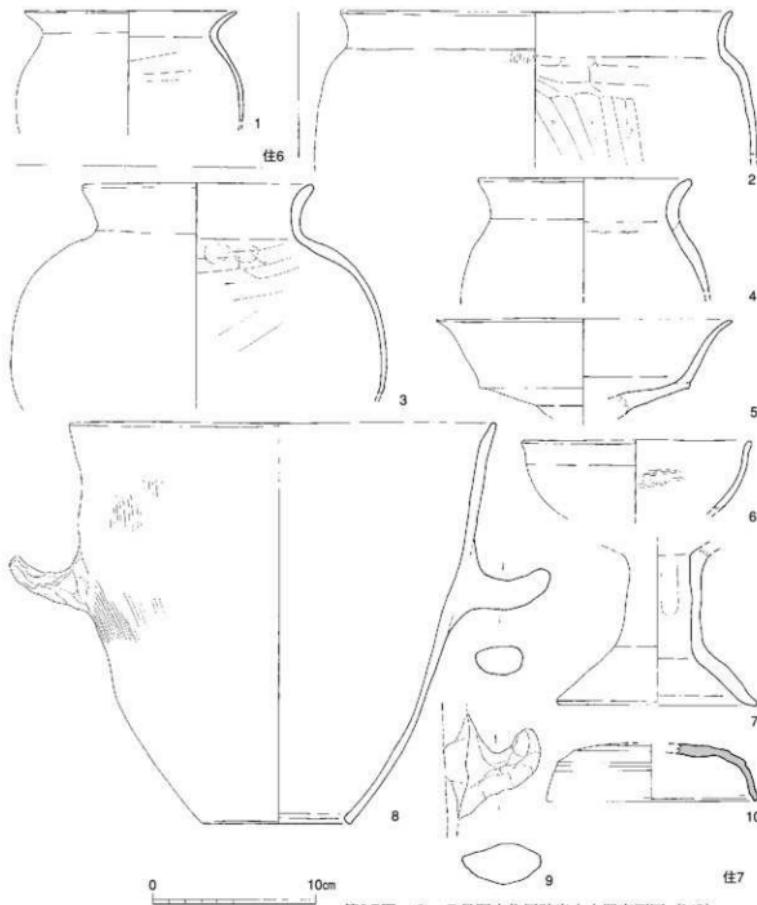
### 5号竪穴住居跡 (図版4、第6図)

調査区南端に位置し、1号竪穴住居跡に切られる。1号竪穴住居跡の貼床を除去した際に確認でき、大部分はわずかに壁際の周溝を確認できたに過ぎない。プランは方形で、北西隅付近を確認したが大部分は調査区外に延びる。柱穴は判然としない。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

### 6号竪穴住居跡 (図版3、第11図)

調査区東端に位置し、3号竪穴住居跡に切られる。方形プランの隅部分のみを確認し、大部分は調査区外に延びる。北壁際には壁溝が巡る。



第15図 6・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 出土土器（第15図）

1は壺で器面は磨滅しているが、内面は削り調整を施しているようである。出土土器はこの1点のみであり、詳細な時期は不明である。

### 7号竪穴住居跡（図版4、第14図）

調査区北東に位置し、1・2・4・7号溝に切られる。床面が深いため多くの溝に切られている割には残りがよく、西壁で0.4m程の壁の立ち上がりが確認できる。平面形態は方形で、東側は7号溝に若干壊されるものの、規模は東西4.6m程、南北4.5m程である。埋土は暗褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合で、黄褐色地山粒を多く含む。主柱穴は4本でいずれも深い。

壁際には壁溝が巡るが、北東部分のみ確認できなかつた。カマドは袖部の残りが悪く明確に確認することができなかつた。焚口付近は浅く掘りくぼめられ、掘形かと思われる。中には高杯脚部片が据わっていた。

### 出土土器（図版10、第15図）

2～4は壺である。2は磨滅が著しいが、外面は一部に刷毛目調整が見られる。内面は削り調整を行い、屈曲部は指押さえを施す。3は体部が大きく張りだす。器面は磨滅が著しいが、内面は削り調整が見られ、屈曲部に指押さえを施す。4は内面に粘土紐の接合痕が見られる。5は高杯で屈曲部は外側に突出し、口縁端部はやや外反する。6は土師器椀で内面は黒色処理を施し箠磨きが確認できる。口縁部は僅かに外反気味に取める。7は器台である。雑なつくりで表面は凹凸が激しい。内面に指押さえが確認できる。8は壺で細長い把手が取り付く。磨滅が著しいが一部に刷毛目調整が確認できる。9は壺の把手で、ソケット状に体部に差し込む構造が確認できる。10は須恵器杯蓋である。外面は段を有し、天井部は回転箠削りを施す。口縁端部内面は弱い沈線を施す。

出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

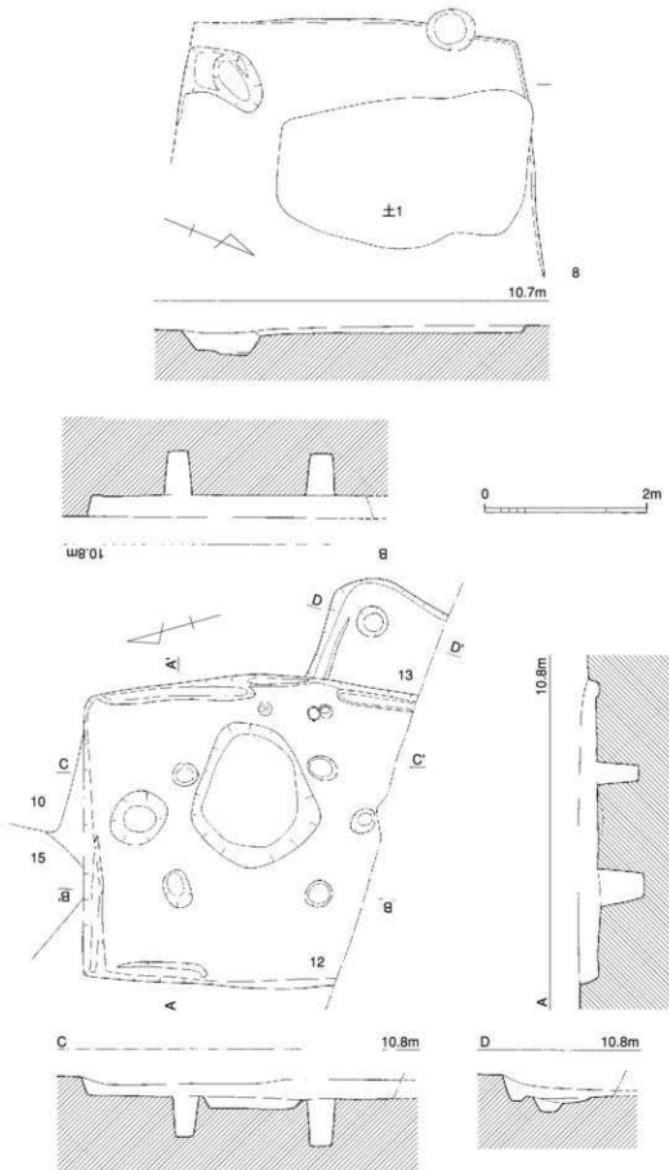
### 8号竪穴住居跡（図版5、第16図）

調査区北寄りに位置し、1号土坑に切られ、9号竪穴住居跡を切る。当初、付近の遺構検出の際に認識できず、9号竪穴住居跡の掘削中に北西側のプランを確認できたにすぎない。また掘削を進める段階で当住居跡よりも新しい1号土坑を確認したこともあり、遺構ごとの遺物の取り上げは上手くできていない。平面プランは方形で、規模は南北は4.2m程である。南側の壁際には0.3m程の深さの土坑が伴うと思われるが、その他柱穴等の住居に伴う施設は判然としない。

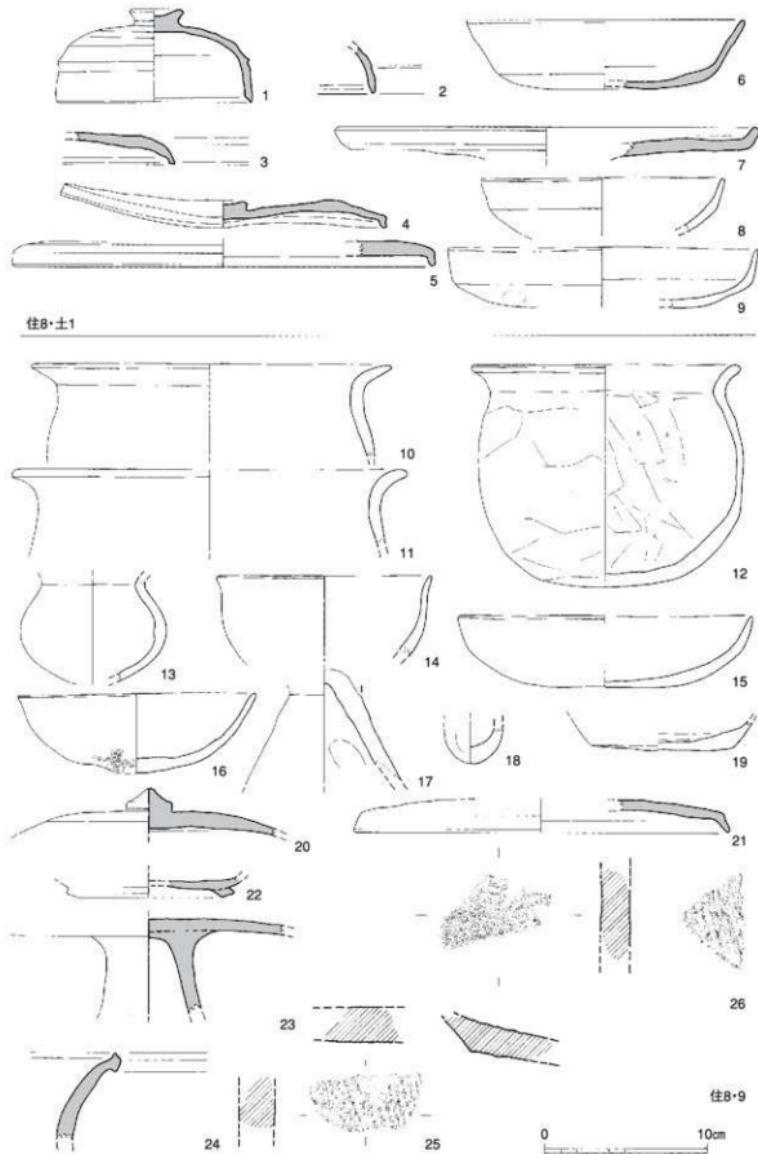
### 出土土器（図版10・11、第17図）

1号土坑及び9号竪穴住居跡との切り合い関係が複雑であったため、遺物は混在した格好でしか確認することができなかつた。1～9は1号土坑との切り合い関係がある部分から出土したもの、10～26は9号竪穴住居跡との切り合い関係がある部分から出土したもので、ここでは一括して説明を行う。

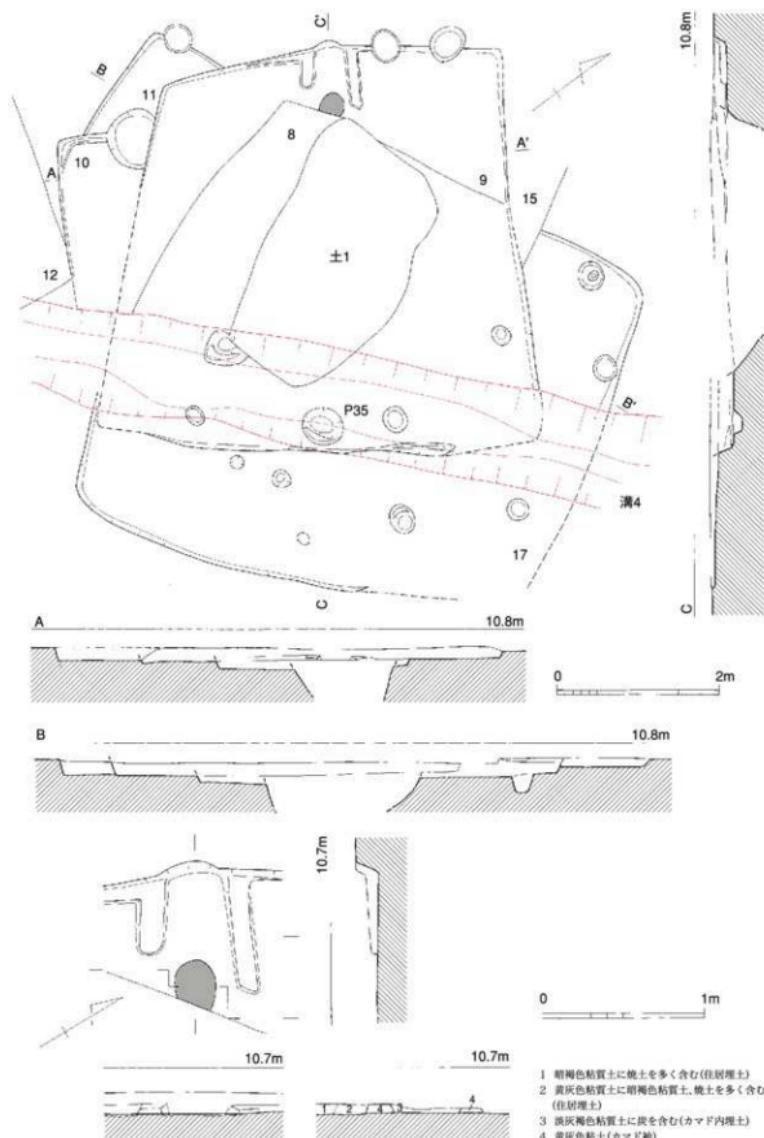
1～5は須恵器杯蓋である。1は頂部が窪むつまみを持ち、天井部と口縁部の境は鋭く突出する。口縁端部は内面に段を有する。2も1と同様だが、外面及び口縁端部内面の段は弱い。3～5はつまみを持つ蓋と思われ、4は焼き歪みが著しい。3の口縁端部は異質で接地面がやや広くなる。4の口縁部外面は少し窪む。6は須恵器杯身で底部は若干窪む。7は須恵器高杯の杯部と思われる。口縁部は長めに立ち上がり、杯部下側は回転箠削りを施す。8・9は土師器杯で口縁部はやや外側に開き



第16図 8・12・13号竪穴住居実測図 (1/60)



第17図 8・9号竪穴住跡出土土器・瓦実測図 (1/3)



第18図 9~11・17号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)

気味に立ち上がる。9は外面に指押さえを施す。

10～12は甕である。12は磨滅が著しいが、内面は削り調整を行う。13は小型壺で口縁部を欠損する。器面は磨滅が著しい。14は鉢で口縁部は僅かに外反する。器面は磨滅しているが、内面は箒磨き調整が確認できる。15・16は土師器碗で器面は磨滅が著しいが、16は一部に刷毛目調整が見られる。17は高杯脚部で、杯部との接合部に擬口縁が見られる。18は手づくね土器で口縁部を欠損する。外面に指押さえが見られる。19は土師器皿で口縁部を欠損する。底面は箒切りの痕跡が見られる。20・21はつまみを持つ須恵器蓋で、21の口縁部はやや長い。22は須恵器杯身で高台が取り付く。23は須恵器高杯である。24は須恵器の甕口縁部で端部は上下に拡張する。25・26は平瓦で凸面は繩叩きを施し、凹面は撫でによって仕上げる。

混在しているが、出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 9号竪穴住居跡（図版5、第18図）

調査区北寄りに位置し、10・11号竪穴住居跡を切り、8号竪穴住居跡に切られる。南東側は4号溝に切られていたため壁面の検出に苦慮したが、平面プランは方形で、規模は北西～南東が5.0m程、北東～南西が4.5m程である。埋土は暗灰黄褐色粘質土を主体とする。

北西側の壁際の中央にカマドを有し、袖部は白っぽい粘土で構築している。焚口部分の床面は赤変している。主柱穴及び周溝は判然としない。

出土土器は8号竪穴住居跡に伴うものと混在して出土したため判然としない。先に述べた遺物の特徴やカマドを有する点から、古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 10号竪穴住居跡（図版5、第18図）

調査区北寄りに位置し、11・12号竪穴住居跡を切り、9号竪穴住居跡及び4号溝に切られる。平面形態は方形だが北西隅部分を確認したにすぎず、全体の規模は不明。西隅では壁溝が確認できた。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明だが、12号竪穴住居跡を切ることから古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 11号竪穴住居跡（図版5、第18図）

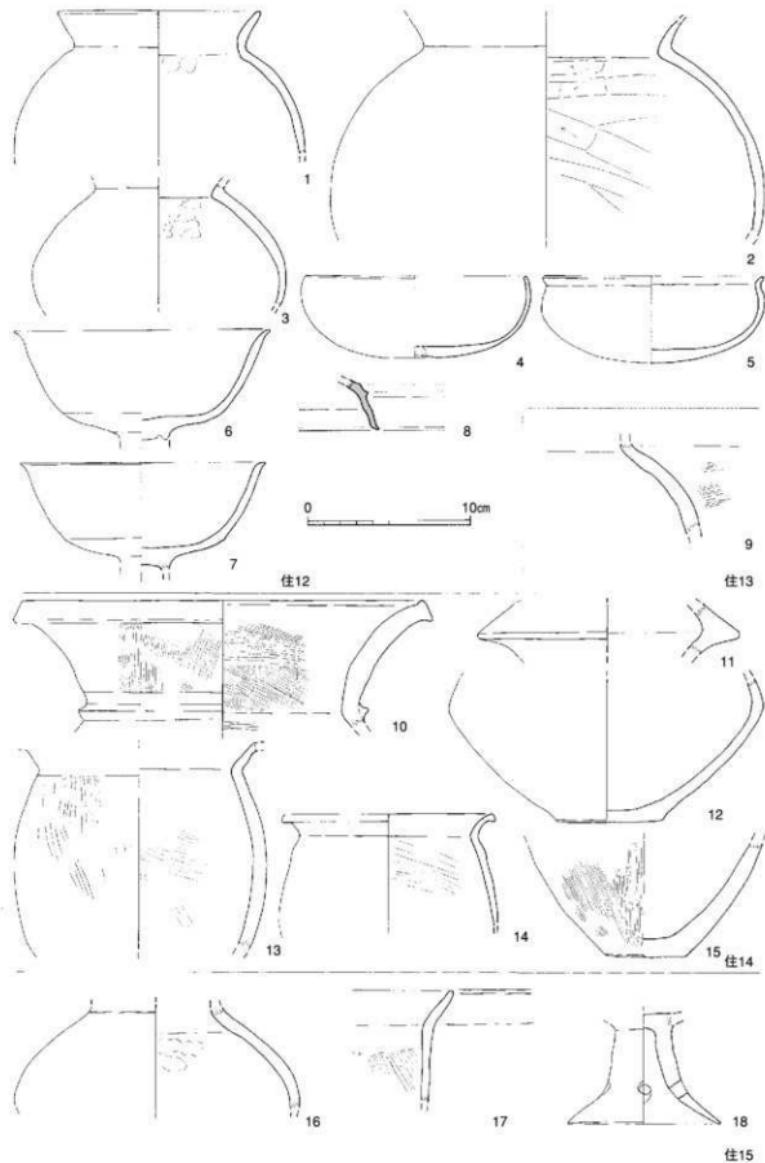
調査区北寄りに位置し、9号・10号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形だが、北西隅付近のみを確認したにすぎず全体の規模は不明。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### 12号竪穴住居跡（図版5、第16図）

調査区北西に位置し、13号竪穴住居跡、15号竪穴住居跡を切り、10号竪穴住居跡に切られる。東西3.8m程の方形プランで、南側は調査区外に延びる。主柱穴は4本である。

床面の掘り込みは凹凸が激しく、地山ブロックを多く含む貼床と思われる土の上面が堅く締まっており、ここが本来の床面と思われる。壁溝が巡るが、貼床を取った状態で検出したため、浅い状態でとぎれるが、本来は全周していたと想定される。南壁際に埋土に焼土が多く確認できたが、貼床面での焼土面の広がりは確認できなかつたため、カマドとは認定できなかつた。



第19図 12~15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 出土土器（図版11、第19図）

1・2は体部が大きく張り出す甕である。器面は磨滅が著しいが、1は内面屈曲部に指押さえ、2は内面に箆削りを施す。3は口縁部が欠損するが壺にならうか。屈曲部内面に鋭い稜が見られ、内面に指押さえを施す。4・5は土師器椀である。体部は丸みを帯び、2は口縁端部が短く外反する。器面は磨滅が著しい。6・7は高杯で体部と口縁部との境に段を形成する。いずれも口縁端部は僅かに外反する。8は須恵器杯蓋で天井部と口縁部との境は鋭く突出し、口縁端部内面は僅かに窪む。

出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

### 13号竪穴住居跡（図版6、第16図）

調査区西端に位置し、12号竪穴住居跡に切られる。大部分は調査区外に延び、北東隅部分のみを確認したにとどまる。

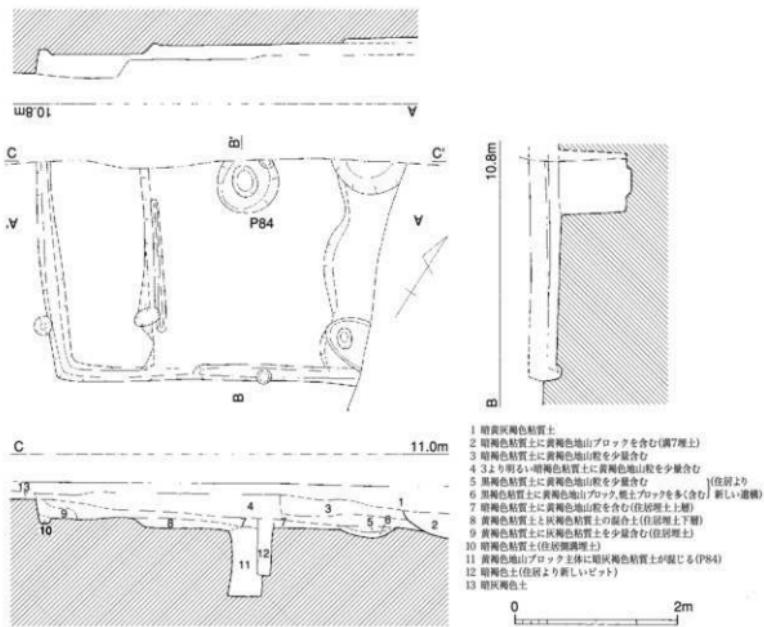
床面の掘り込みは凹凸が激しく、本来の床面は完掘状態よりも少し上で、貼床を施していたと思われる。主柱穴は調査区外に存在が予想される。部分的に壁溝が確認できた。

### 出土土器（第19図）

9は壺で口縁部を欠損する。器面は磨滅しているが外面に刷毛目調整の痕跡が残る。図化できる土器は以上であり、詳細な時期は不明である。

### 14号竪穴住居跡（図版6、第20図）

調査区北東隅に位置し、6・7号溝に切られる。平面形態は方形で、北側は調査区外に延びる。



第20図 14号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ベッド状遺構を西側に持つが、段差部分の一部は少し掘りすぎてしまった。土層の観察から、このベッド状遺構の段差部分はやや緩やかに立ち上がるようである。また住居の東側は7号溝によって切られるが、際に近い部分は貼床を施していたためか床面が判然とせず、掘りすぎてしまっている。

床面には壁溝が巡り、ベッド状遺構の下端にも浅く認められる。埋土はベッド状遺構の高さの上下で大きく異なり、上層は暗褐色粘質土、下層は黄褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合土である。遺物はほとんどが上層からの出土であった。柱穴は調査区北壁にかかる深いもの(P84)がその一つを構成する可能性がある。

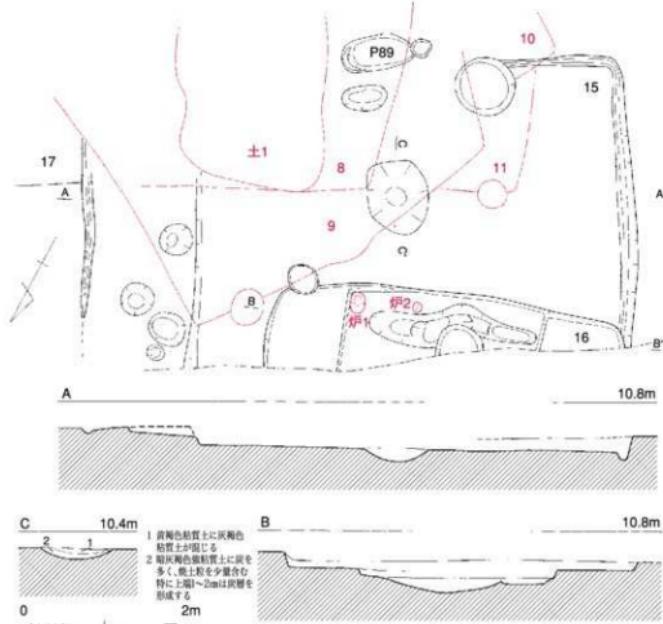
#### 出土土器 (第19図)

10・11は壺である。10は屈曲部に突帶を巡らし、口縁端部は上下に少し拡張する。外面に刷毛目調整を施す。11はく字形口縁の壺である。口縁端部は僅かに欠損する。12は壺の底部で平底を呈する。13・14は甕である。13は口縁端部を僅かに欠損するが外側に拡張するようである。14は口縁端部に面を持つ。15は甕の底部で平底を呈する。外面は刷毛目調整、内面は撫で調整を行う。

出土土器から弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 15号竪穴住居跡 (図版6、第21図)

調査区北端に位置し、南側は8～12号竪穴住居跡に切られ、北側は16号竪穴住居跡に切られる。付近は遺構の切り合いか激しく、南東側は確認することができなかった。平面プランは方形で、ベッド状遺構を伴うという想定が正しければ、規模は東西約6.7m程となり非常に大型の部類となる。



第21図 15・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)

壁際には壁溝が巡る。東側には壁と平行して段差が認められ、住居内のベッド状遺構と想定される。床面中央には擂鉢状の浅いくぼみが存在し、埋土に焼土や炭屑を含むことから痕跡と思われる。主柱穴は判然としない。埋土は黄褐色の地山に近い土で、若干褐色に濁ったものである。

#### 出土土器（第19図）

16は壺で口縁部は欠損する。器面は磨滅が著しく内面は指押さえを施す。17は壺で口縁端部はやや内彌氣味に取まる。18は高杯脚部で穿孔は4箇所認められる。

出土土器は少ないが弥生時代後期の堅穴住居跡と考えられる。

#### 16号堅穴住居跡（図版6、第21図）

調査区北端に位置し、15号堅穴住居跡を切る。規模は東西約4.4m程の方形プランだが、北側の大部分は調査区外に延びる。埋土は暗褐色粘質土で、床面には直線的な段差や中央に掘り込みが存在するが、掘り込みは凹凸が激しく、この部分の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土を含むもので住居の埋土と異なることから、本来はこの上面に貼床を施した可能性が高い。主柱穴は判然とせず、調査区北壁にかかるビットは本堅穴住居跡の埋土を切っているもので伴うものではない。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

#### 17号堅穴住居跡（図版5、第18図）

調査区北寄りに位置し、9号・15号堅穴住居跡に切られる。4号溝の南側で僅かながら方形プランの段差を確認でき、9号堅穴住居跡の東の方形プランと一連の遺構と想定している。北西-南東は5.2m程、北東-南西は5.9m程の方形プランで主柱穴は判然としない。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、切り合ひ関係から弥生時代後期の堅穴住居跡と考えられる。

### 3. 土 坑

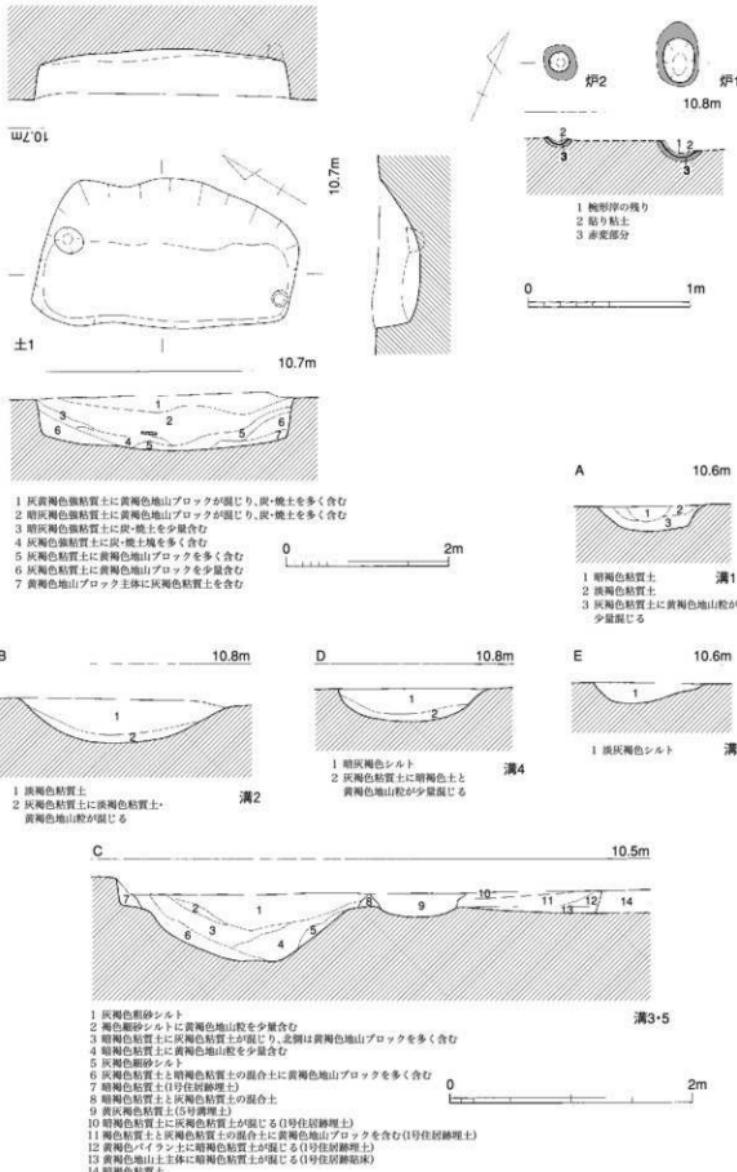
#### 1号土坑（図版7、第22図）

調査区北寄りに位置し、8号堅穴住居跡を切る。8・9号堅穴住居跡を掘削している途中で長方形に埋土が異なる部分があることに気づきプランを確認することができた。埋土は灰褐色の粘質が非常に強いもので、多量の炭及び焼土を含む。

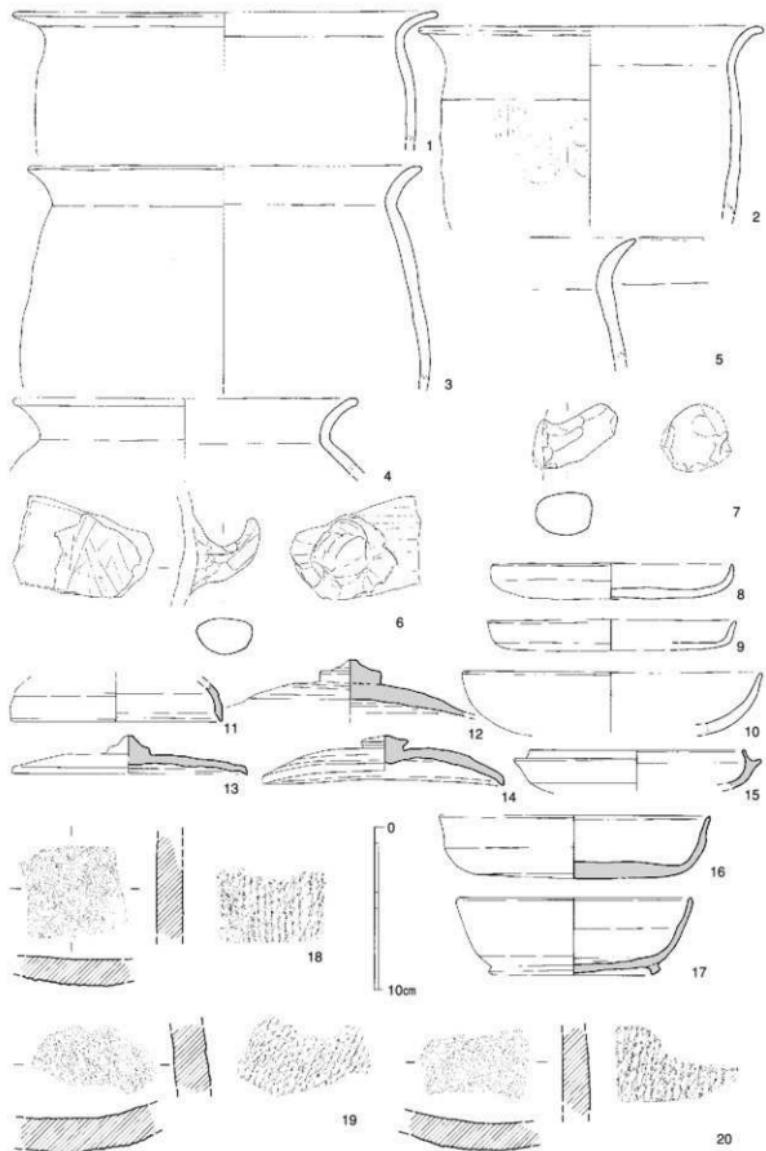
平面形態は長方形に近く、規模は長軸約3.2m、短軸約1.8mである。床面は平坦で壁面は垂直気味に立ち上がるが、東側のみ緩やかに立ち上がる。床面の南北両壁際にそれぞれ小ビットが存在する。床面は特に焼けた痕跡等は認められない。

#### 出土土器（図版11、第23・24図）

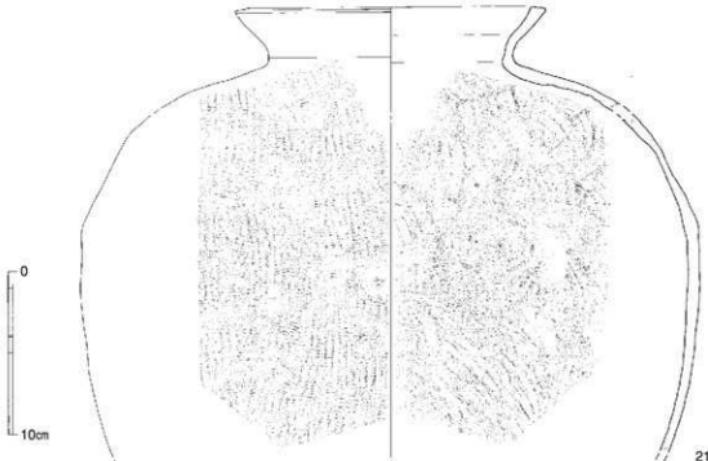
1～5は壺である。いずれも器面は磨滅しているが、2は体部外面に粗い刷毛目調整が確認でき、押さえによって器面に凹凸が見られる。6・7は瓶の把手で、6は体部内面に接合のために粘土を撫でつけている。7は接合部の擬口縁が認められ、ソケット状に体部に差し込んだことが想定される。8～10は土師器杯である。8・9は口縁部が短く丸みを持って立ち上がる。底面は凹凸があるのが特徴的である。10は底部が欠損しているが、椀状を呈すると思われる。11～14は須恵器杯蓋である。



第22図 1号土坑、1・2号炉跡、1～6号溝実測図（土坑は1/60、炉跡は1/30、溝は1/40）



第23圖 1号土坑出土土器・瓦実測図 (1/3)



第24図 1号土坑出土土器実測図 (1/3)

11は口縁部と天井部の境に僅かな段が見られ、口縁端部内面に弱い沈線を持つ。12～14はつまみを持ち、天井部は回転籠削りを行う。14は焼歪みが激しい。15～17は須恵器杯身である。15は口縁部が短く、底部に回転籠削りを行う。16は高台を持たず、体部は丸みを帯びて立ち上がる。17は深い体部に高台を持つ。底部内面の中心がやや高い。18～20は平瓦である。いずれも凸面に網叩きを行い、凹面は撫でによって仕上げる。21は須恵器大甕である。口縁部は内湾気味に収め、端部は肥厚し窪んでいる。体部外面は細かな格子叩きを行い、内面は同心円文が見られる。

古墳時代の土器も混入しているが、出土土器から奈良時代の土坑と考えられる。

#### 4. 炉跡

##### 1号炉跡 (図版7、第22図)

調査区北端に位置し、16号竪穴住居跡の上で2号炉跡と並ぶ格好となる。調査では包含層を掘削する段階で焼土を確認したが、明確な構造面は確認できず、炉跡を残して周りを掘削したため、炉跡は浮き上がった状態で記録を作成した。平面プランはやや梢円形を呈し、長軸約0.4m、短軸約0.25の範囲で焼土が広がる。中央は擂鉢状に窪み、床面に粘土の層が薄く確認できた。中央には椀形溝の残りが存在し、小鍛冶を行ったものと思われる。断面は焼土が5cm程の厚さまで確認できた。

##### 2号炉跡 (図版8、第22図)

調査区北端に位置し、16号竪穴住居跡の上で1号炉跡と並ぶ格好となる。1号炉跡と同様に調査では包含層を掘削する段階で焼土を確認し、炉跡を残して周りを掘削したため、炉跡は浮き上がった状態で記録を作成した。平面プランは円形で、径は約0.2mと1号炉跡よりも小さい。中央は擂鉢状に窪み、床面に粘土の層が薄く確認できた。焼土は断面約3cm程の厚さまで確認できた。

## 5. 溝状遺構

### 1号溝（図版8、第22図）

調査区中央に位置し、4・7号竪穴住居跡、7号溝を切る。北東—南西方向に直線的に延び、幅は約0.9m、断面は浅いU字状を呈する。埋土は上層に淡褐色粘質土、下層に灰褐色粘質土を主体としたものが堆積する。床面は北東—南西方向でほぼ平坦である。

#### 出土土器（第26図）

1は須恵器杯蓋でつまみを持ち、口縁端部は斜め下方向に弱く屈曲する。天井部に回転籠削りを行う。2は甕と思われるが小破片のため詳細は不明である。

出土土器は少ないが、切り合い関係及び他の溝の埋土との類似性から中世の溝と考えられる。

### 2号溝（図版8、第22図）

調査区中央に位置し、4・7号竪穴住居跡、7号溝を切る。1号溝と平行し、北東—南西方向に延びる。幅は約1.7mで、断面は浅いU字状を呈し、1号溝より浅く立ち上がりも緩やかである。埋土は1号溝とほぼ同様である。床面は北西に向かって若干下がる。

#### 出土土器（図版11、第25図）

3は須恵器高杯で口縁部は欠損している。体部に2ヶ所明瞭な段を有する。4・5は須恵器杯身である。4は細く高い高台がハ字状に取り付く。5は口縁端部内面に弱い沈線が見られる。6は土師器小皿で底面に糸切痕が確認できる。7は白磁で口縁部は玉縁状に肥厚する。8は龍泉窯の青磁で口縁部は僅かに外反する。9は平瓦で凸面に繩叩きを施す。

7・8の遺物から中世の溝と考えられる。

### 3号溝（図版8・9、第22図）

調査区南端の位置で、1・2号住居跡を切る。北東—南西方向に延び、幅は約1.9mで断面はU字状を呈する。埋土は下層は地山ブロックを含む暗褐色土主体の土だが、上層は灰褐色粗砂シルトである。

#### 出土土器（第25図）

10・11は甕の底部である。10は尖り底で外面は削り調整を行う。11は平底だがやや丸みを帯びる。器面は磨滅が著しい。12は瓶の把手で牛角状に先端が上に向く。体部内面に横方向の刷毛目調整が確認できる。13・14は須恵器大甕である。14は口縁部外面に粘土紐を貼り付け肥厚する。

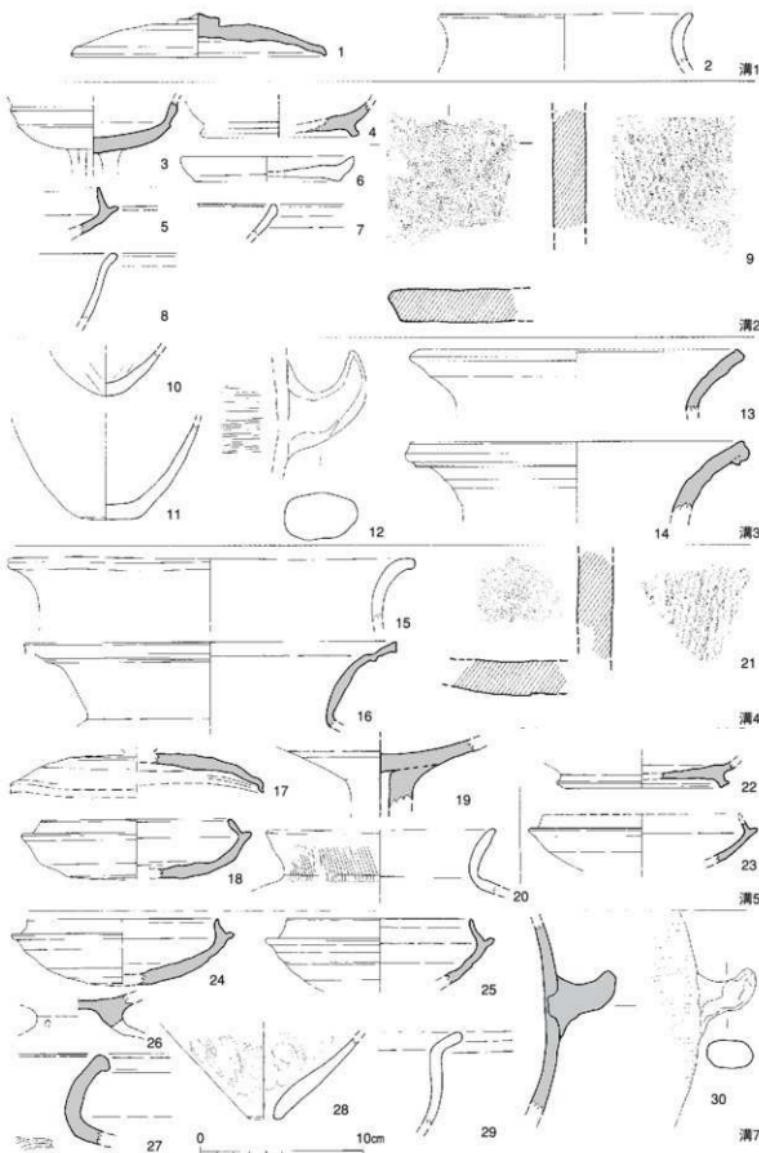
出土土器は少ないが、切り合い関係及び他の溝の埋土との類似性から中世の溝と考えられる。

### 4号溝（図版9、第22図）

調査区北寄りに位置し、7・8・9・12・13・17号竪穴住居跡、7号溝を切る。1・2号溝と同じく北東—南西方向に延びるが、6号溝の付近で若干方向が変わっている。幅は約1.3mで床面は北西に向かって若干下がるが、6号溝付近で馬の背状に少し高くなる。埋土は上層は暗灰褐色シルト、下層は灰褐色粘質土を主体としたものである。

#### 出土土器（第25図）

15は甕で口縁端部は若干外に肥厚する。16は須恵器甕で口縁端部は肥厚し壅む。口縁部上位で



第25図 溝出土土器・瓦実測図 (1/3)

内面は窪み、外面は丸みを帯びて突出する箇所が見られる。17は須恵器杯蓋で口縁部外面は強い撫でにより窪む。天井部は回転籠削りを行う。焼歪みが顕著に見られる。18は須恵器杯身で底部に回転籠削りを行う。19は須恵器高杯である。20は土師器の壺にならうか。口縁部外面は縱方向の刷毛目調整が見られる。21は平瓦で凸面に繩叩きを施す。

出土土器は少ないが、切り合い関係及び他の溝の埋土との類似性から中世の溝と考えられる。

#### 5号溝（図版8、第23図）

調査区南端に位置し、1号竪穴住居跡を切る。当初は3号溝も含め大きな住居跡との認識で掘削を行っていたが、掘削の途中で黄灰褐色粘質土が北東—南西方向に帶状に確認できたためこれを5号溝とした。幅は約0.8mで断面は浅いU字状を呈する。東側は途中で切れるが、堀り込み面はもっと高いことが想定され、本来は延びていた可能性が高い。埋土は黄灰褐色粘質土である。

出土土器（第25図）

22・23は須恵器杯身である。22は高台がハ字状に取り付く。23は口縁端部が欠損する。

出土土器は少ないが、切り合い関係及び他の溝の埋土との類似性から中世の溝と考えられる。

#### 6号溝（図版9、第23図）

調査区北東に位置し、14号竪穴住居跡を切る。検出当初は4号溝の一部かとも思われたが、床面が4号溝とは連続しないため別の溝と判断した。幅は約0.9mで断面は浅いU字状を呈する。4号溝との切り合いは、当初一連の溝と想定してしまったため判断できなかった。埋土は淡灰褐色シルトである。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明だが、6号溝と同じく中世の溝と考えられる。

#### 7号溝（図版9）

調査区東壁際で確認でき、南北に延びる。7・14号竪穴住居跡を切り、1・2・4号溝に切られる。東側の立ち上がりは調査区外になるため確認できていない。断面は緩やかな浅いU字状を呈し、底面はところどころで窪み一定でない。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを含むものである。

出土土器（図版11、第25図）

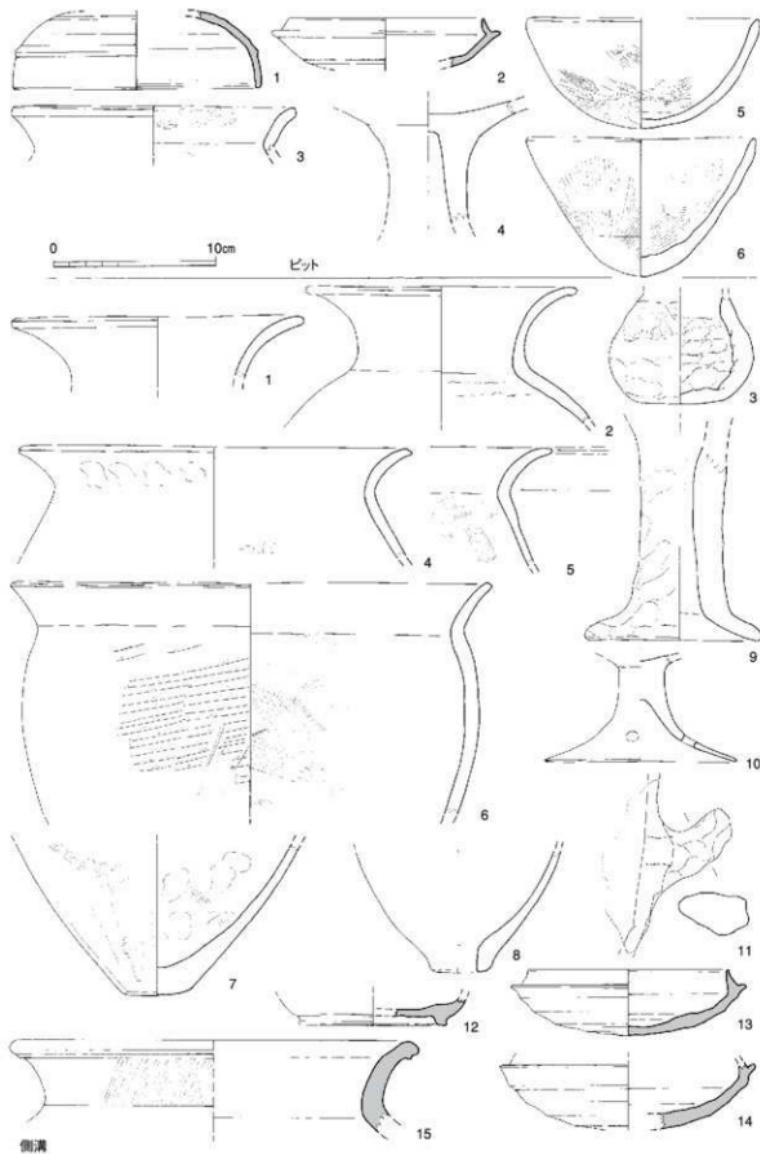
24・25は須恵器杯身でいずれも底部付近は回転籠削りを行う。26は須恵器高杯である。透孔が一部で確認でき、その配置から本来は3ヶ所にあったことが想定できる。27は須恵器の壺で口縁端部は外側に肥厚する。28は壺の底部で外面は刷毛目調整、内面は刷毛目調整と指押さえが顕著に見られる。29は窪と思われるが磨滅が著しい。30は須恵器壺の把手部分である。ソケット状に体部に差し込む様子が窺える。体部外面は横方向のカキ目調整が見られる。

出土土器及び切り合い関係から奈良時代の溝の可能性が考えられる。

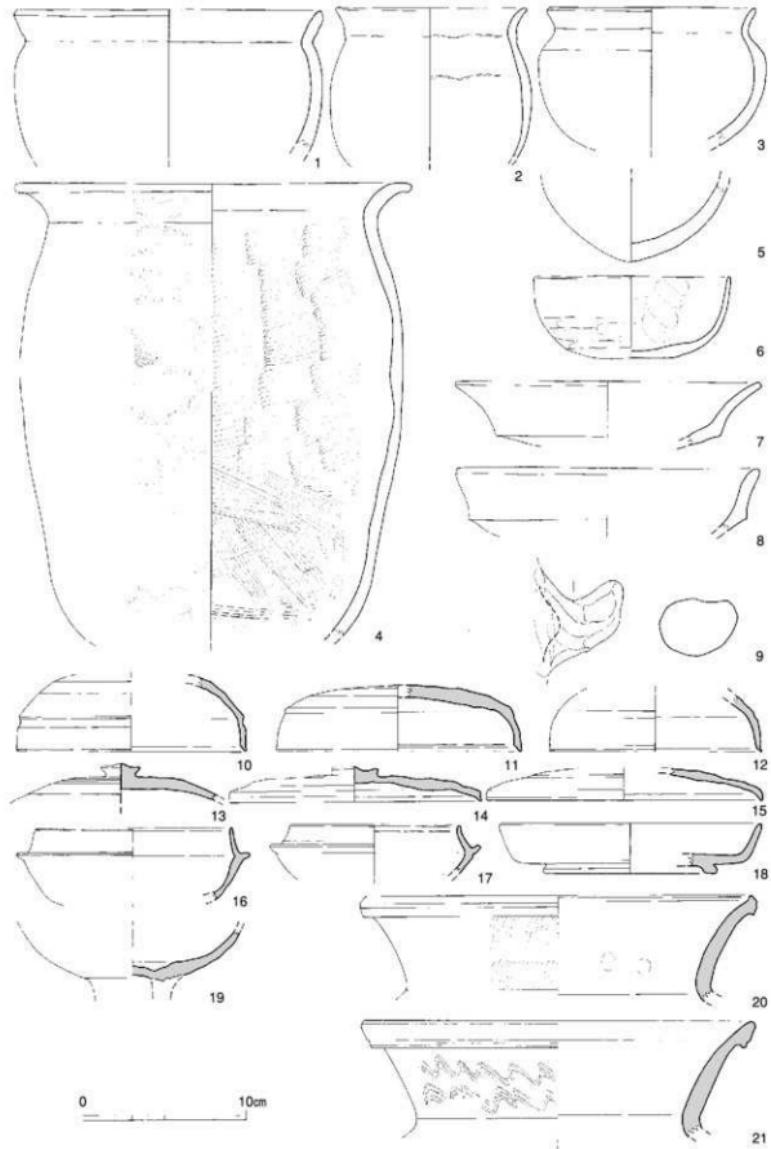
### 6. その他出土遺物

#### ピット出土土器（第26図）

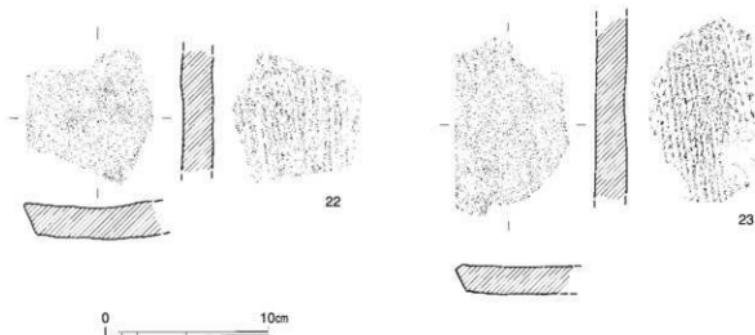
1・2は8・9・17号竪穴住居跡調査時に確認したP35出土のものである。1は須恵器杯蓋で口縁部



第26図 ピット・調査区側溝出土土器実測図 (1/3)



第27図 包含層出土土器実測図 (1/3)



第28図 包含層出土瓦実測図 (1/3)

との境に段を有し、口縁端部内面に弱い沈線を施す。天井部は回転箆削りを行う。2は須恵器杯身である。3は14号竪穴住居跡に伴う可能性のあるP84出土の甕で屈曲部内面に稜を形成する。内面に横方向の刷毛目調整を行う。4はP89出土の高杯で器面は磨滅が著しい。5・6はP62出土の丸底の鉢である。内外面刷毛目調整を行う。

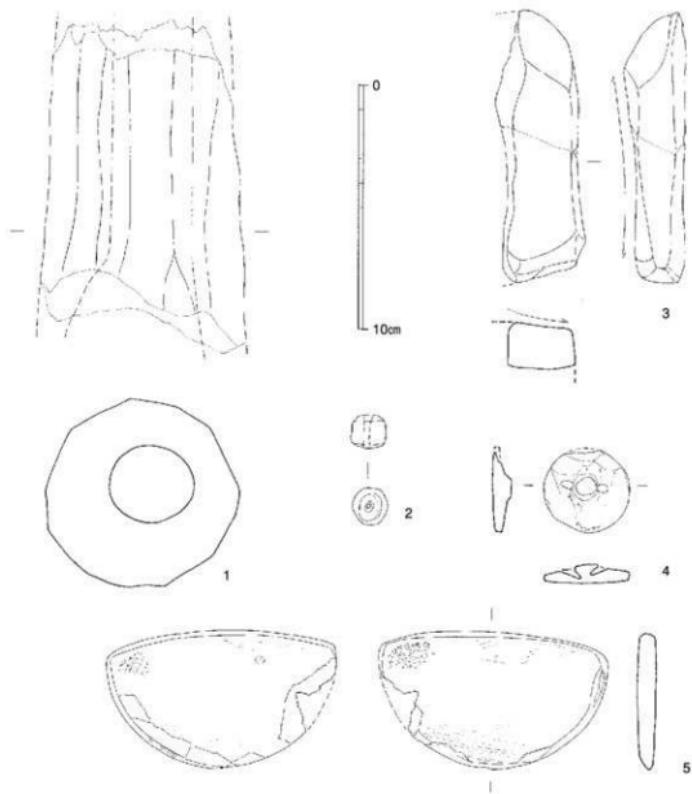
#### 調査区側溝出土土器（第26図）

調査着手時に調査区の東側壁に沿って側溝を掘削したが、その際に出土した土器である。

1・2は壺である。いずれも磨滅が著しく調整は不明だが、2は体部上位内面に粘土の接合痕が確認できる。3は小型の壺で非常に雑なつくりである。内外面に粘土紐の接合痕と押さえが顕著に見られ、外面で一部刷毛目調整が確認できる。4～7は甕である。4は器面の磨滅が著しいが、口縁部外面に指押さえが見られ、体部内面に一部横方向の刷毛目調整が確認できる。6は体部外面に叩き調整が見られる。7は甕の底部でやや尖り気味になる。体部外面に刷毛目調整、内面に刷毛目調整と指押さえが見られる。8は甕の底部で器面の磨滅が著しい。9は雑なつくりの高杯になろうか。外面は指押さえが顕著に見られ、内面は絞り痕が見られる。10は高杯脚部である。欠損しているが透孔は3箇所になると思われる。11は甕の把手である。12は須恵器杯身で高台が取り付く。13・14は須恵器杯身で底部は回転箆削りを行う。15は須恵器甕で口縁端部は外側に肥厚し、下端部に細い突帯を貼り付ける。口縁部外面は刷毛目調整の後に撫で調整を行う。

#### 包含層出土土器・瓦（図版12、第27・28図）

1～4は甕である。1～3は器面の磨滅が著しいが、2は内面に粘土紐の接合痕が確認できる。4は長胴の甕で、体部内面から強い押さえを行ったためか外面はいびつで凹凸が激しい。体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整を行う。5は甕の底部で尖り気味の丸底を呈する。6は椀状のもので、器面は磨滅が著しいため調整は不明だが、内面は指押さえ、外面は工具によると思われる横方向の調整が見られる。7・8は高杯で、屈曲部外面に鋭い稜を形成するのに対し、内面は緩やかである。9は甕の把手で内面に2cm程の窪みが見られる。



第29図 出土土製品・石製品実測図 (1/2)

10～15は須恵器杯蓋である。10は口縁部との境に段を有する。天井部に回転籠削りを行う。11は口縁部との境が丸みを帯び、口縁端部内面に小さな段が見られる。天井部に回転籠削りを行う。12は口縁部との境に稜が見られ、その下側が窪む。口縁端部は僅かに外反し、内面に小さな段が見られる。13はつまみを持ち、天井部に回転籠削りを行う。14は低いつまみを持ち、口縁端部は下向きに屈曲する。天井部に回転籠削りを行う。

16～18は須恵器杯身である。18は焼け歪みが大きい。高台がハ字状に取り付く。19は須恵器高杯である。脚部が剥がれているが擬口縁が確認できる。20・21は須恵器甕である。20は口縁端部が上方向・下方向に拡張し肥厚する。口縁部外面は刷毛目調整の後に撫で調整を行う。21は口縁端部外面が肥厚し、特に下方向に突出する。口縁部外面は波状文が見られる。22・23は平瓦である。

いずれも凸面に叩きを施す。

#### 石・土製品（図版12、第29図）

V-4区からは少量ながら石製品、土製品も出土している。ここでは一括して報告する。1は1号土坑出土のフイゴの羽口である。スサを混入したと思われ、細かな繊維痕が確認できる。表面は工具で調整したためか面を持つ。内面は被熱のため橙色を呈する。2は2号竪穴住居跡出土の土玉である。円柱状を呈し焼成前穿孔を行う。孔はやや楕円形を呈する。3は2号竪穴住居跡出土の砥石である。砂岩で欠損しているが、最低1面の砥面が確認でき、大きく窪んでいる。4は1号竪穴住居跡及び3・5号溝の切り合い部分から出土した滑石製模造鏡である。端部が一部欠損している。凸面中央はボタン状に作り出し、その両側から斜め方向に孔を穿つが貫通はしていない。5は6号溝から出土した両刃の石庖丁である。一部に敲打痕が確認できる。粗懸の孔が見られないが、穿孔を試みたような浅い窪みが確認できる。

## 7. 小 結

本調査区においては弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が4軒、古墳時代後期の竪穴住居跡が8軒確認された。その他検出が一部に留まり詳細な時期が不明の竪穴住居跡は5軒確認されたが、埋土の状況や貼床を施す等の特徴から古墳時代後期の可能性のあるものが多いと思われる。調査区は狭いものの古墳時代後期に竪穴住居の数が増えると共に、切り合い関係が多く認められる状況が窺え、集落の変遷上、当該期に大きな画期があることが確認された。

奈良時代の遺構は1号土坑のみであったが、大型で長方形を呈し、壁面の立ち上がりが急である点が特徴的である。埋土には多量の炭・焼土を含み、性格は不明ながら数少ない当該期の遺構として注目される。数は少ないものの平瓦片が出土していることも特筆される。

また時期は特定されないが、上記土坑に近接して鍛冶関連の炉跡が2基確認された。椀形滓が残っており、小鍛冶を行ったと思われる。古墳時代後期の竪穴住居跡の上に構築されており、奈良時代もしくは中世の所産である可能性が高いが、上記奈良時代の土坑と関係がある可能性も考えられる。

本調査区で最も新しい時期の遺構は中世の溝である。比較的規模の大きいものが4条、途中で途切れるものが2条確認されたが、いずれも北東-南西方向にはば直線的に延び、断面は浅いU字状を呈し、埋土も類似する。